

三 權 野 笹

獨み懸らんとする其勢ひ武術に於ては跡へは引かぬ權三郎なれど
一大事なりと身を交した見へアハヤ懸み懸れやうとする 權三郎は打
つて仰向けさまに谷底へ轉げ落ちた綱をば得たりと追付て同じ
所へ轉び落ちるを倒れながらも權三郎は刀の切先きを上へ向け
て置たから綱をば下腹をシタ、カ突貫かれた綱をも之にやア懸
いたと見へて少し勢が弱つた權三郎は得たどと身を起しサン、
先に切り付け二字國俊の指添を以て止を指した處骨に當つて刀
んだから一息ホツと吐いて居る處へまた一匹の猛獸が躍り
出た 權三郎は之こそ今の夫婦いだらうと思つたがモ一身体
は充分疲れて仕舞ひ逆も退治る事は出来ぬ……ア、武運拙き
某し去作らふもザ、

三 權 野 笹

振舞して立向う綱々の方ではヒ、ツと笑つたのなら未だ宜が
「ヤン早まるな旅のお武家……權三郎はビツクを仕ました 權三郎
しからん獸物もあつたもんだと能く見ると熊の皮で作らへた羽
織を着し熊の皮の頭巾を被つて居て目ばかりパチクリ出して居
る 權三郎は人間であつたかと思つたが夜中の事といひ或は山賊
の類かとも思つたゆへ少しも油断は仕ない彼方も手に持つ管槍
を引そばめ ○某し事は此山中鹿谷に住む次郎作とすもの近
頃此山に綱々が出て作物を荒すと云ふ事ゆへ近付て突殺そうと
思ひ斯の如くに出立ちて毎晩獸物の行方を尋ねて居ましたか圖
らずも只今貴殿の傍に余所ながら見物いたし驚き入りました
傍座います權三郎も會釋して道に迷ひ斯る仕儀に及んだ事を物
語りました故 ○夫は嘘々困りの事で傍座いましてやう見苦し
ゆうは傍座るが何卒傍立寄を願ひたう存する權三郎も野宿と極

三 權 野 笹

た位のものですから勝はれしを幸ひに歸へついで参ると家こそ
破れては居が上段の床の間には鏡櫃が飾つてあり管箱一本外に
武器類も見へました 權切は先程よりの言葉遣ひといひ必き由
ある者の世を忍ぶのに相違あるまいとソコで自分の姓名をも名
乗り武術熱心の事を申出た、〇イヤお客人ソッ丁重に仰せられ
ては何とも恐れ入りますが人の姓名を聞て我姓名を名乗らぬとい
ふも不禮の至り何をお隠しやしましやう某は播州上月の城主木
下備後守殿家来佐布里左内重嘉といふ管箱の指南を致したるの
で伊座るが梶川軍太夫と云ふ佞辨者の爲め臆言に逢ひ終に永の
暇を賜はり上月を追拂はれ夫より浪人となつて此山中に閑居致
す様な次第……去乍ら押して辨解致したなら又主君のお疑ひ
も解ける様な事も伊座らうが夫では返つて殿の不明を人に告げ
知する譯只天の時を待つ斗りで伊座いますと嘆息しての物語り

三 權 野 笹

權三郎も左内の迹懐を聞て深く其心中を思ひ遣り翌る日此處を
出立致しましたが夫から一先づ播州上月へ立越ぬ左内の爲めに
俺れは仲間奉公に遣入り色々風聞を聞いて見昇ると梶川軍太夫
の讒言だと云ふ事が儘かに分つた夫から左内の冤罪梶川の隠悪
を悉く一通に認め家老の手許へ差し出したが殿様も一方ならぬ
驚き茲に家中一統の評定となつて梶川軍太夫は悪事露顯佐布里
左内はお召ひ戻しと云ふ事に相成りましたが之は權三郎が義侠
の働きで伊座います

第 五 席

權三郎は自分の思ふ通り梶川軍太夫を黜けさせ佐布里左内の歸
參が叶ふやうに取計らつたから功成り名遂げて身退くと云ふ話
もあるゆへ佐布里にも暇を告げ上月を立出で夫から大坂を指し

三 權 野 笹

て参りました頃は十月の中旬なれば小春返しの時候は何となく
長閑であり升から天満宮へ参詣し天満橋より大川の景色を眺め
て居ると突然炎木組の俠客炎木正太の子分達が人達から權三郎に
打つて懸る權無禮致すなッど打つて懸る奴の腕をねじ上げ八
方へ追散らすスルト今度は大勢を語つて再び權三郎の歸りを窺
ひ生も懲りもなく喧嘩を賣つて懸る此時全ヒ大坂で積の小六と
云ふ男達があります此喧嘩を聞き付けて仲裁に遣入り双方の
様子を探ねて見た處炎木組の方では全く人達ひでした事權三郎
には何の遺恨もないと云ふ事が解りました小六賊に武家様
サ譯は座いませんと云ふ事を人達ひで致した事何卒私に免
と勘辨なすつて下さいます權何の左様事が解れば夫で
宜い決して拙者の方では彼是はヤさん好んで事を構へるやうな
次第は無い筈で目出度双方の手拍りが済んだ處が此小六と云ふ

三 權 野 笹

のは素と武家の出生の者で武藝に秀でた者では座いますから權
三郎の優れた腕前に感服いたし改めて兄弟の義を結んだ權三
郎も諸國修行を致すと云ふものゝ實は種田の門弟を打ち取つ
たから其ホトボリのさめるまで國を立退いて居るんだ夫れ故何
國に居たとて別に差支へはない權イヤ小六殿大分世話になつ
たが何か厄介序にモ一暫らく當地に滞在を致したいが只斯して
居るも余り妙理に盡きた譯率う夫よりは身に覺ぬた尺八の指南
でも致したら世の中を風流に渡れて面白からうと思ふが如何な
ものだらう小夫りやア結構な事です殊に大坂は尺八の流行處
ですから屹度お弟子も附てお慰みにもなりませしやうと之から早
速家を一軒借り子分の者に萬事の勝手向を賭はせ權三郎は笹野
声雪といふ表札を掲げ尺八指南所と看板を出したソ一して合間
には小六の子分共に劍術の稽古などをして遣つて居るから實に

三 權 野 笹

世の中の苦も忘れて仕舞うばかりだ、其年も暮れ何れも千歳の
春を祝ふ松飾注連を掛け新年を祝す……門口へ年末だ若き娘の
子が順禮唄を謡ひながら立ち止まつた。〇通れ、春早々延喜で
もねい順禮の娘は叱られても別に行かうとも仕ない表札に目を
着けて、順三郎様といふお武士様では座いませんか。〇ナ、
になつた權三郎様といふお武士様では座いませんか。〇ナ、
なんだ紀州からお出になつた權三郎様だ……全体手前は何ん
と云ふ者だ。順三郎様にお咄しやして下さいませ。〇ナ、左様かい夫じやア
且那に取次ぎまじやうと之から權三郎の處へ參つて之々云々と
娘の容子を咄しました。權三郎は國元なる妹のお梅が尋ねて參つ
たのか自身立つて玄關へ來て見ると十一の時別れた妹のお梅で
す。權三郎お梅か、テ其姿で此處へ參るといふには何か仔細でもあ

三 權 野 笹

るのか……マア、足を洗つて此處へ上るが宜い。芝から子分
が色々介抱してお梅を一間へ伴う。權三郎お梅……ナ、此様
をして年端も行ぬに只た一人……此處迄兄を尋ねて參ると云ふ
は何か變つた様子でもあるのか。爾はれてお梅は只ック、と泣
くばかり嬉しいやら悲しいやら一時に込上つたので座い
ます。梅何からお咄しやして宜い事やら尊兄がお國を出て此方
は父上には病氣勝ち醫師にも色々骨を折つて頂き妾も手の届
く丈、介抱の上しましたので、一やら本腹はなさいました。夫
から段々老衰いたし妾も心配して居ると去年の秋、前を勤め
て歸る折曲者が跡を附けまして終々父上様を欺し打ち果敢なき
最後を遂げられましたと聞いて驚く權三郎義胤、權三郎何父上
には曲者の爲め欺し討に相成つた……ナ、曲者の手懸り
は分つて居るか。梅、ハ、未だ行術は知れませんけれど妾が愁傷

三 權 野 笹

いたしますのをは不感と思し召され役人も種々穿鑿なすつて下さいますと其場に落ちてた小柄といふのは儲かに種田五郎左衛門の所持の品に相違座いません 權、俺れ悪くい五郎左衛門某への遺趣晴しに父上を晴討に致すとは返すくも卑怯な奴と拳を握つて無念の涙に暮れたりける

第 六 席

妹お梅よりして父權太夫が横死の願末を聞き男泣きに泣きまして無念の涙に袖を絞りけるが 權、ア、イツまで歎いたとて詮ないこと夫より直に敵討の爲め當地を出發いたとう 梅、兄上様が御出立になりませすなら何卒妾しもお邪魔ながらお供にお連れなすつて下さいませし妾しは殿様から仇討の御免許状まで頂戴いたして座いますとソコへ紀州公よとば免しになつたお墨附とば

三 權 野 笹

餓別を取擧げて權三郎に見せる權三郎は墨附きと御免許状を押し頂き君公の厚き御恩を拜し 權、お前が左様いふ志なら之から少しの間太刀筋を教へて夫から出發する事に仕やう夫から小六にも父の横死の始末より妹の遙々尋ねて來た事を咄しお梅は我家へ留置きて八重垣流小太刀の秘術を授ける處父の誓を討たうといふ一心であるから實に夜油断なく稽古をするナカ、十四五才の小娘とは覺ぬ程だ些か數ヶ月の内に早や太刀筋も覺ぬツキの一手丈は充分出來るやうに成りました權三郎も之を見て大に歡び或日の事稽古に勞れて横になり眠つて居る處を折よしと權三郎拔足さし足忍び寄り掛けた刀の響音をガキツとさせたお梅はがバと跳ね置きて四方を屹度見渡したる眼の配り身の構へ實に法に叶つて居る兄義胤も頻りに感心し 權、モ、斯なれば敵に出逢つて戦はずとも止め位は刺すのに差支へはない

三 權 野 笹

夫では一日も早く同様に警の行術を尋ねて父が修羅の志願を
晴さんど之より權三郎は丸山妙安寺にて盧無僧の許しを受け
色の小袖に尺八袋へ一刀を仕込み天蓋に面を隠しお梅は素の順
禮姿……兩人支度も出来ましたから小六は首途を祝ひ兄妹の者
は東海道を下つて参る途々も油断なく敵に目を付けて居りまし
たが更に手懸りもなく江戸へ道入つて石野傳一郎と云ふ手込神
樂坂に道場を構へて居る紀州の藩士で座います其人の處へ尋
ねて参つた傳イマ之はお珍らしい笹野殿父上にも誠は不慮の
伊炎離無慘傷で座らう……お妹子も一緒で……ハ、ア夫
では敵討の爲めは出發で座るかッ口迄は出たが敵討の事計
りには傳一郎も尋ねませんでしたスルと權三郎よりして仇討の次
第を透し一冊し權三郎殿をお尋ねやたも實は拙者の家に傳はる
父祖傳來で伊座ひますすが八重垣流の小太刀此の機合の奥義は

三 權 野 笹

一人知るものはない併し今度斯うして仇討に出發いたしたから
には何時なんとき返す討に相成やも圖り知れざる處何うか之れ
丈は平生の別戀を以て貴殿にお傳へやたい傳之は有難
きは意を盡ります拙者如き未熟の者に八重垣流小太刀の奥義を
傳へ下さるのには誠に余つて喜ばしき至……去れど只は
直傳に預るばかりで返禮がなれば心に済まざる事就ては未
熟の至り乍ら我三傳離相流の奥義をお傳へや上まじやう權三郎
も大いに喜び然らば何分宜しくと半月余り此家に逗留して互に
武術を鍛練するケレども槍を取つては當時向ふへ立つものな
いと噂の高い槍の權三と異名を取つたる權三郎ナカハ傳一郎
の及ぶどころでない其内に双方とも奥儀の秘密を打明け互に一
禮して一間を出んどする傳權三郎殿拙者の奥儀は之れのみな
ら秘傳の中の秘傳あり夫をも合せてお傳へやさう權ハ、ア

三 權 野 笹

然らば何卒直傳に授りたい傳一郎は權三郎の耳許へ口を寄せ
て傳之は實秘の事なれど當時貴殿の敵と見え種田五郎左衛
門は上州高崎安藤對島守殿の家中にて槍術の指南をいたし居
ると云ふ事仄に拙者の耳へ道入つた……秘密とすは此一事
有難き仰を蒙つたり然らば直ちに罷越し實否を直すて座ら
うと權三郎は飛立つ嬉しさを暇乞さへソコに上州指して出
致す果して敵に廻り逢ふや否や次席のお楽しみ……

第 七 席

上州高崎を指して出發致しましたる笹野權三郎義胤は二日間
て返着いたした夫から家老安藤典膳に對面いたし仇討の免許
状を見せ種田の舊惡を委敷述べましたが其節對馬守殿は江戸在
勤の時であるゆへ捨置き難しと早速種田を呼び寄せたダ種田

三 權 野 笹

も中々の奸物ゆへ名前を逸平と改め五郎左衛門とは名乗つて居
りません逸平は何心なく家老の屋敷へと參る……バラツ
と踊出たる取手の役人 役上意……上意……と叫びながらト
其場へ捨伏せましたッコで両刀を預り舊惡の次第を訊問致
されたが現在權三郎の目の前ではモ一嘘も吐けません 逸平は
已みがたき武士の意氣地を以て權太夫を討ち取りましたに相違
座いません悉皆白狀に及んだから追分川邊の半屋に嚴敷縛き
置き早速此赴きを江戸のお邸へ言上いたす權三郎は高崎に返留
して沙汰を相待つて居ります然るに未だ種田の運命の盡き
るにや愛に逸平を義兄と頼んで居る大坂方の殘党赤間樂右衛門
腰野又八と云ふ武藝の勝れたる兩人種田が日頃の恩義を思ひ追
分川の水底を潜り半屋を破つて逸平を扶ひ出した權三郎は此近
所に宿を取つて居る事でありませゆへ一人の半番が飛んで參り

三 權 野 笹

半番モ、且、那樣飛んだ事が出来ました。只今、追分川の水底を潜つて曲者二人が、半内へ恐び入り、種田逸平を連れ出しました。權ナニ逸平が逃げたッ……夫れ猶豫は相成らんと直に身支度に及んで跡を追懸けました。敵の者共は余程慌てたものか、竹藪の内へ逃げ込んで仕舞ひました。に、權三郎も續いて追懸るスルと、斜に切つた竹株に足を踏抜きを致し、終に其場に仆れた。權ニ、殘念と裁を立出で本街道より追懸けたが、一、行衛は更に解りません。此事を聞き及んだる安藤典膳、典切は大事の曲者を取返し、たか實に殘念至極の至りだ……ケレども此れは自分の罪自殺して詫を致すよと外はないと早速權三郎を屋敷へ招き自分の思ふ一、伍一什と物罷り何も此世に永らへて居ては貴殿へ對し又は多くの者に對し安藤典膳は頼み甲斐の無い侍だと云はれるも無念の至り夫れ故此坊で自殺してや、障致さうと云ふ事を申出た。驚き

三 權 野 笹

ました權三郎、權之は飛でも無い事を仰せられます。是迄、伊方に預つて舊悪を白状させますまで、に、骨折下さつた物を私、左の怪我より終に猶豫いたし、且は敵の運命未だ盡きざるに依り取返し、た譯、涉禮を申上るさへあるに、貴殿よりして、誤のなんの權三郎、只恐れ入る外は、座いません、何卒左様な事を仰せられず再び敵の廻り來る事も、座つたら何卒其時は、力添へを願ひたいと、之を宥め足の全快致すのを待ち再び上方筋へと志した。丁度、蘇州兵庫まで廻り廻つて参り、旅宿を取つて、晝の勞れを安めて居る時に隣り座敷へ泊り合したのも、矢張り武士らしく三四人頻りに、術の咄しを致して居る其咄しの内に、筑後柳河の城主立花家にて、今度の槍術の達人を三人召し抱へになつたが、古今の名人と見えて、殿の、珍寵愛も一方ならぬと云ふ事を咄しをして居る。權之は取寄りな咄しを承つた……殊に寄つたら種田赤間等の三人が、方角違

三 權 野 笹

ひに九州路へ近づき込み居るやも圖られぬナシロ往て見て様
子を探るに越した事はなれど丁度其時長州赤間關迄参る便船が
あつたから夫へ乗り込み兵庫の港を出帆に及んだ船は順風に帆
を擧げ其日の暮れ方に播磨灘へと差し懸る折しも跡よと三艘の
早船エツッッ……エツッッ……と掛聲を合し船を押し立て
来る權三郎は不圖目を覺し月の光りに窺ひ見れば之れなん海上
を横行いたす海賊等でありす……權三郎海賊を退治て武勇の
譽を願はすの件り次席のお楽しみと致します

第 八 席

權三郎は充分身支度を致し妹お梅は荷物の側へ忍ばせ自分ば空
船を漕付飛乗るゝと寡た振を致して居る其内に數多の海賊共
船を漕付飛乗るゝと寡た振を致して居る其内に數多の海賊共

三 權 野 笹

命であるからと片隅に隠れて居る處が船主の善兵衛と云ふのは
武士も及ばぬ大丈夫であつて狼籍いたす盜賊を相手に刀を抜い
て渡り合はう便船なしたる旅人は孰れも戦々慄々して居ります此中
に一人高山軍藤太と云ふ武者修行の侍が居りましたが武者修行
でも仕て歩行く位な者だからコンな時にやア一番先さへ出て勤
くのであります賊の奴原三人迄も切り殺し勇氣を振つて戦つた
りケレど如何にせん相手は取換へ引換へ新手が這入つて切り付
けられるから幾ら武者修行をして歩行く侍でも身は鐵石に非ら
ざる故數ヶ所の疵を受け終に賊の爲めに海中へ投落された此時
善兵衛も力盡きて其場に倒れて仕舞ひましたので賊は益々
乱暴狼藉荷物を小舟へ移さんと致すツクゝ見て居たる權三郎
義胤權三郎此分じやア飛道具を持つて居る心配はないソレな
らば安神なものだ例令二十人三十人懸つても恐れは致さんど

三 權 野 世

ツクと其處へ躍り出た。メヤア未だ邪魔者が居やアがるッレ。
めッ……ど一人の首領と覺しきものが下知を致した。權ッス小
賊等何を吐きやアがる。ど一刀スラッど抜き、弱し火勢の中へ斬り
込んで、瞬く間に六七人物の見事に切り倒され、見ちやア堪らな
船に居ました。が手下の敗北して、斬り倒されるを見ちやア堪らな
い。此方の船を目標懸けて飛乗るを權三郎は見てカラ、ど打突ひ
權三郎は故と拳打に小手をした、か打つたナニッ手練の太刀
切り込む一刀。巨賊心得たぞ……と時流し二打三打打合つたが
先きで拳打を喰つたんだから堪らない。巨賊残念……と云ひさ
まボロリと打落したる刀を取らんとするを三間はかり投り附け
離なく生捕りに致しました。先刻からの戦ひに小賊共は一人残ら
ず斬り殺し船の中の荷物は一紙半銭も取られないので權三郎は

三 權 野 世

神の如くに敬はれた夫から船を室の津に着けて血の付たるを
ひ清め海賊を退治いたした事を訴へ出で賊首をば繩附の儘さし
出しました。役人中は直ちに之を牢に入れ、吟味して見た處が之れ
は淡州無宿赤澤十内と云ふ者にて、年來海賊を營業にして居たと
いふ事を白状に及んだ……悪い營業もあつたもんで……夫から
此れは罪科の逃れぬ處である。と云ふんで、終に室の津の並木道に
於て磔にされた。後のお咄し……權三郎には厚き褒褒の
言葉があつて一同は再び茲に風待をなま無難に長州下の關へ着
致した。ソコで權三郎は善兵衛にも別れを告げ、豊前小倉へ着致し
ました。が突に播州明石の城主小笠原右近將監殿には今より三年
前此小倉の城へ伊國換へと相成りました。から權三郎も小倉へ來
た。幸ひ高田又兵衛を訪ねて見やうと旅宿の亭主に様子を聞き
合せて見る處。今ヒヤア宗伯と名を改ため、綾瀬川といふ處に隠居

三 權 野 笹

いたして居り若先生が伊家督を相續なすつて居るといふ事だ
此咄を承つたから早速綾瀬川へ尋ねて居つて宗伯に面會をいた
しました。宗ヲ一是はお珍らしいア見苦しい隠居所だが此方
へお上んなさい。權先生には何時も伊壯健で大慶に存じます今
度は丁度此邊へ通り合しましたを幸ひに伊尋ねました。がッ
……と之より養父權太夫が人手に懸つて相果た事より上州高崎
にて敵に引り逢つた處赤間腰野といふ兩人の爲めに取逆した事
并に彼等は筑後の柳河立花家に奉公いたし居る由を聞き及んだ
により之を討たんが爲めに出發して參つたと云ふ事を具さに語
つた宗伯も之を聞いて其孝義を深く感じ且ッ兄妹の不仕合を嘆
息して共に涙に袖を絞りましたスルと其頃天下に英名を轟かし
た宮本無三四と云ふ真面目二刀流の元祖でありました。が當時は
居して開敵の身と相成つて居る夫だものだから高田の隠居所へ

三 權 野 笹

來りては恭杯を圍んで樂しむと致し居る今日も遣つて參つて種
々宗伯と昔し咄などして居る。宗宮本老……茲に居る壯年は槍
術の名人噂の高い槍の權三郎で伊座るが實は之れくの譯で敵
討に出發し參つた道すがら以前よりの別懸故此老人をも尋ねて
呉れましたので……無ハ、ア夫れは初めて對面いたしました
が末頼母しいお方だ……イヤ敵討と云ふが子夫りやア中々一通
りならぬ苦しみなもので先年佐々木岸柳を討つた事もあるが詰
り敵に呑まれたらやア往ないよト言つて侮つて懸つたら尙往ん……
高田氏折角斯してお若身空でもつて敵打にお出懸になつた事だ
からは非敵を討たして上たいが立花家に目指す敵が居るといふ
んなら如何で伊座る吾々兩人もは同道やして何とか先方に懸合
つて見様じやアありませんか。又成程夫は面白い、デは早速伊同
道やさうでは無いか。權イヤ伊兩所の志は辱ら伊座るか拙者

も存じ寄がゆ座いますから何卒其儘に差置を願ひますと爰に四
五日逗留いたし武術の咄しに日を送つて居つたが權イツ迄居
てもゆ名残は盡ませぬゆへ是でゆ暇を致しますと之から妹お梅
を伴ひ柳河差して出立致しましたが愈々仇討の件と相成ります

第九席

筑後柳河を差して出立いたしたる笹野權三郎義胤は盧無僧の織
を以て當所寺町なる普化宗一心寺へ宿を求め住僧に對面して四
方八方の物語りなぞ致す元來此住僧とやすのは誠に實意があつ
て又武邊の心掛けもあり旁いたすに依り此人ならば万事を打明
けて相談して差支へないと思ひ是から敵討の事を語り主君の
免許状を見せ拝いたし權三郎は夫に就ては當家へ近來召し抱へ
に相成つた武邊の達人三名あるソウだが其の名前を存せでゆ

三 權 野 笹

座いましてやうか住左様でゆ座います手前も酔まい事は克く存
じませんが兄は種田一水軒と云ひて惣髮で色黒く丈高く最も異
体の先生又二人の弟と云ふのは赤間某腰野某といつて何れも槍
術の達人でして頗る殿の妙意に叶ひ出頭第一とす事でゆ座る
と住僧の咄し權三郎は之を必定敵の奴原に相違あるまいと胸
には充分浮びましたが扱克く確かめての上でなければ何れも立花
家へ願ひを出すと云ふ譯に往かない夫處で一心寺に暫らく逗留
いたして一水軒の様子を見る處が惣髮にこそなつて居れ腰ふ事
なき種田五郎左衛門だソコで早速願ひを上た處が何う事が問違
つたものか敵國の間者だと云ふ事になり遂に權三郎は捕はれの
身と相成り引廻しの上礫の刑と云ふ事に相成つた此事を聞き及
んだる一心寺に殘つて居た妹のお梅……サア氣が氣じやアあり
ません全半狂亂の有様……住僧も見るに見兼ねて克く……様子

三 權 野 笹

三 權 野 笹

を問ひ訂して見ると豊前小倉の城下綾瀬川といふ處に高田宗伯
先先生といふ知己があること云ふ事だ……ソレではッど一心寺の住
僧も義心に富んだ者だから自身出向いて宗伯先生に逢ひ權三郎
殿が云々之々の危難に逢つてモ一今日明日の命だと云ふ事を物
語つた。宗之は何しろ飛んだ冤罪を蒙つたものだから是れも種
田の讒言に相違あるまい早速出發して救ひ出して遣らうからど
住僧に咄しを致して居る所へ例の宮本無三四老が遣つて參つた
宗、ア宮本老、大變が bodies いたしたが是非之は貴殿にも一臂の力
を添へられたい。宮大變とは如何なる事。宗實は笹野權三郎が
之れ、の次第だと掻摘んで物語る。宮夫は飛んだ事だ、アは早
速、同道、サうと直ちに身支度を致して筑後の柳河へ乗込んで
參つた。宮高田老、噂に聞けば並木外にて今にも權三郎殿は刑場
の窟と消ゆるとやらの事モ、猶豫致さば後悔を噛むと及ぶ

三 權 野 笹

まい貴殿は之より直ぐに刑場へ赴きモ、危き時は一刀兩斷の處
置に及んで救ひ出すやうに願ひたい拙者は直に家老立花三彌殿
に面會いたし冤罪を訴へ種田は亡父の仇だといふ証據を立るか
ら、宗、然らば苦勞ながら左様は願ひやそうと兩人左右へ別れ
高田宗伯は並木外れの刑場へ往て見ると驚いた權三郎は磔臺の
上へ乗せられアハヤ獄卒共が素槍をシゴひて両脇へ突懸やうと
する。飛込み素槍を持つたる獄卒共兩人を水も堪らぬ斬り拂ひまし
と、如何せん當時天下の英雄と人も吾も許す高田又兵衛吉次で、伊
座いまますから年を老つたからと云つて勇氣は壯年に異なる事は
なく、悉く左右へ邪魔者を斬り散し、ヤツと聲を懸けて權三郎を磔
臺より下し縛を解いて勞はるソコへ汗馬に鞭つて矢を射る如く

三 權 野 笹

に懸け付たのは當家馬術の指南番向井藏人で彦座いませが殿より下されし赦免の状を懐に致して參つたト云ふのは即ち宮本無三四の骨折で家老立花三彌に冤罪を述べたからで彦座いませはコで改めて種田一水軒は縛の身となり吟味を受けた處が終に包み終せず武士の意氣地に依り笹野權太夫を打ち取つて退散いたしましたと云ふ事を白状したので夫じやア尋常に勝負させた方が克いと評議は忽ち一決いたしソコで十間四面の矢來を拵へ權三郎お梅は充分支度に及んで北の口より入り來り種田五郎左衛門は南の口より入り來る全体仇討には夫れ法式のあるもので彦座いませするが夫は略すといたし兩人互に大刀を閃かし左を討てば右へ交し右を討ては左へ開き一往一來虚々實々秘術を盡して戦ふと雖も武術の達人殊に孝義勇敢十万人に勝れたる權三郎の太刀先きに争でか及びましやう八重垣流奥義の氣合と共に候

三 權 野 笹

り下す一刀を受け損じ終に五郎左衛門は其掛へ斬り倒されたお梅も一刀スラリと抜き放ち共に止めを刺したるは實に天晴なる働さで座いますが多年の本望も達したに依り一先づ紀州へ歸らうとするの家老立花三彌は大に思ふ處があると言上し終に權三郎を貫ひ受けて再び筑後柳河へ歸り之より權三郎は永く立花家の臣下と相成りました………彦退屈様

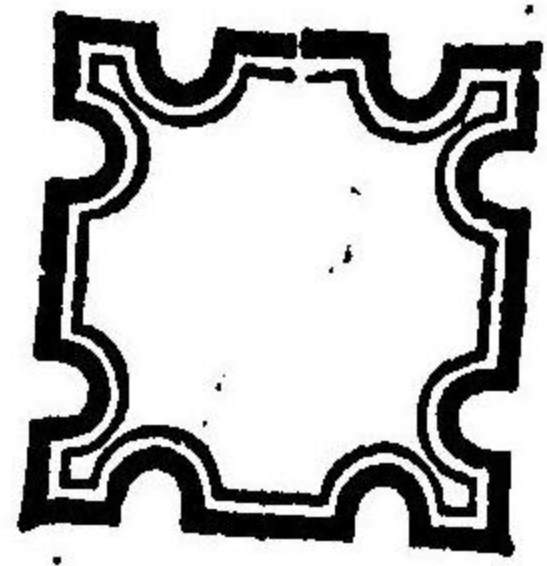
笹 野 權 三 終

田宮坊太郎

田宮坊太郎仇討

第一席

エ、此度は有名ある田宮坊太郎の傳記を伺ひまする時は寛永九年の春徳川三代將軍家光公の御代天下も泰平に治まりまして津々浦々迄も至極靜謐で侈座いす別けても紀州大納言頼宣卿は本國和歌山にあらせられましては祝儀の爲め家老番頭を始めと致し諸士一同を大廣間へ召しに相成つて酒下されが侈座いたしました此時殿の侈氣に入りの老臣に四宮織部正とすものありしが紀州雜賀に於て一万二千石を賜はりて頗る派振りの宜しい名望家で侈座いす併此人は誠に腹の能くない奸物で何日も上の意に入るような言をのみや上げます夫れ故此日も頼宣卿と物語りをいたして侈相手をするのは織部正が持ち切りといふような次第附家老の安藤帯刀杯も自然と殿の



田宮坊太郎

六
此言葉が薄らぐような譯ですから世の中の人には誠に薄情な者で誰も彼れも四宮に取入るような譯ですゆへ自づと權威を擅にする次第でムいす併し酒下されも事なく此日は済みまえて思ひく退城致しすすが獨り安藤帶刀ばかりは人より遅れてお下りに寄りましたといふは何か深く考へる處があつての事でありす夫れから間もなく帶刀は鐵砲納の件に就いて江戸へ上り彼れ是れ一年ばかり滞在して歸りました處サア伊家は僅かの間に非常な亂脈夫とすする當時日の出の四宮織部正が殿に向つて頻りに淫酒を勧めたるの結果であるからサア安藤帶刀に於ても黙つては居られませんナゼとせば己れは權現様の見出しに預つて紀州家の附家老では座います斯様な時にこそ伊見を上るのが此人の役目です夫れ故大總心配致して今四宮をアノ儘で置けば伊三家ともいはれて天下に重んぜらるゝ紀州家の亂れる基であるから不慮ながらも此儘にはして置けないとッ

田宮坊太郎

七
コは流石附家老の權力のある處で伊座います猶豫ならじと帶刀に於ては早速秘密の取調に懸り四宮織部正はコレノ不始末があるといふ確かな證據を押へて於いて登城いたして頼宣卿へは諫言を申し上げます殿も帶刀には一目於て居ります事ですから頼宣卿大に手が悪かつた側妾を於たのも實の處は織部正からの勧めであつたのじや 登早速の聞濟で有難き仕合せに座います就ては其織部正はお家の爲めに害をなすとも忠を盡す可き人物では無いませぬ故斯様な者は遠ざけらるゝ様願はしう存じます夫とすお家の爲め決して彼を憎むでもなければ又出頭を嫉む譯でなく奸悪の曲物に大祿を賜はる事は恐れながら君の伊目違ひにて終には如何なる騒動を來すやも圖られません故伊諫言す次第でありますと憚る處なく言上致して何やら認めたる者を奉りました頼宣卿も伊手に取られて暫らく伊考へて了したが頼宣卿、予の誤りであつた此上は其方に萬事宜敷

頼む能きに計らへどの上意で伊座いました帯刀も有難く伊受け致して退出致しましたが幸に頼宣卿の御聰明と帯刀の忠義によつて紀州家も事無く治まりましたが終に四宮織部正は改易仰付られました

第二一席

四宮は俺れの奸曲心より紀州家追放に相成り其上武士の二字を伊取上げて伊座いますから飛ぶ鳥も落したる昨日の姿に引き換へて今は町人の姿に相成つたは自業自得然るに織部正には二人の子供がありまして長男を頼負と申し次男を源八郎と申しますが頼負は兎角病心でお負に頼負の甚六とか申し少し抜作の方でカラモ一役に立ません夫に引き換へ次男源八郎は至つて發明な生れ附きで文武二道に達し當年廿一才の若者なるにも係らず一刀流の劍術を能く致しますが父織部の心懸け宜しからぬよりして斯く町人に相成りし事を深く

念に思ひ俺れは是非共侍になつて再び家名を興うと思ひました四宮と名乗つては大に憚かる處が伊座いますからソコデ四ノ字を田と改め田宮源八郎と申して讃州九龜の城下なる養源寺の住職玄如和尚は兼て俗縁の者ですから之を便つて参りました幸ひ和尚の懇意なる土屋甚五右衛門と申すものが度々茶を打ちに参りますから之へ武家奉公の儀を頼み込みました此人は九龜の城主生駒豊守殿の家中にて足輕頭を勤めて居るものです夫れ故此人に頼めば直きに足輕の口なごは伊座いますので此人に頼んで漸々取米十石二人扶持の足輕に住み込みました併し源八郎は中々足輕杯にして置く可き人物ではない文武両道に達して居りますのですからけれ共俺れの能を頼はしません然るに或日の事非番で伊座いますから一人で家にボツランとして居るも退屈とつれづれの餘りに硯を取出し何やら書て居ました處へ丁度同役の佐藤平右衛門といふ是れも非番に當りましたもの

田宮坊太郎

ですから遊びに参りまして 平源八郎殿は在宅ですかとズーと上つて参つたが長屋住居の足輕の事ですから奥も立關もありやアしません 源コレハハア何卒此方へ 平イヤお構ひ下さるな余り退屈しますから御咄しに出ましたと是から色々世間咄し杯致して居りますすが平右衛門は不圖傍らを見るに源八郎が無駄書をした物が其處らに散かつてあるから手に取つて見ると中々以て美事な筆跡 平是れは何も恐入つたる御筆跡では座ると大に感心致し暫らく考へて居りましたが 平時に源八郎殿貴所にも御存じの通り某しには二人の子供が座るが師匠もなき事とて自分では杯を認めて習はせて居るが親の手本では一向子供が承知しない幸ひは筆勢といひ實に美事な事ですが何卒手本を一つ御願ひ下さいが如何で御座いますしや折入つての御願ひですが 源夫はお安い御用です素より未熟な拙者で御座るが御構ひなくは何時でも差上りましようといふコトは懇意な間

田宮坊太郎

柄ですから心よく承知致しました夫から此事誰れ言となしに家中一般に知れ渡り吾れもくと手本を認めて貰ひに参りますすが源八郎も既に一人へ認めて遣つた事ですから厭ども言へず承知いたす處果は小供を遣して教へて貰ひたいと迄言はれたければ是斗りは断りましたたが茲に一ツの珍事出来いたし大に武名を願はすのお咄し次席に譲つてや上ます

第三席

其頃生駒壹岐守殿は家臣に堀口源太左衛門親常とやすものが座いましたたが此人は龜井流の達人で五十人扶持を以て召抱へられ一家中の師範をいたし門弟も殖て終には大守の御師範役とあり出頭第一の侍となつて道場も益々盛んになりました夫故に源太左衛門自然と慢心を生じ四國九州にて我右へ立つ者は一人もない杯とやして居りま

田宮坊末郎

す處が此頃田宮源八郎足輕に召抱へられてより手跡の美事なる處から大層評判に相成りました文人と武人とは互に肌が合ませんもので「どうだい源八郎と云ふ奴は根が町人だから手は能いだらうが武術と來たらば少しも出來まい」「夫は知れた事は漸く此間足輕位ひに抱へられたんだもの……併し彼奴は此間女房を持つたそうだが癪に障るナア夫に頗る別嬪と來て居るから虫が治らねへ」「夫じやアドウだいないつか此道場へ呼び寄せて武藝の仕合をさせ困らしてやろうじやアないか」「夫は面白からうと云ふので全氣相求ひる大發成處へ田宮源八郎役所から退けて今此處を通り懸りました」「ヲイ」と噂をすれば影どやらソリヤ彼處へ來たのが源八郎だ呼込んで一打に致して呉れよう面白いくと手を打つて喜んで居る處へ源八郎は神ならぬ身の其んな事は知ませんから何心なく堀口の道場の前へ來懸りますと一人其處へ飛出して來て「ゴリヤ源八郎其方も當家の足輕に住込ひか

田宮坊太郎

らは武藝も嗜んで居るうが何流でも苦しくない是非一手所望いたさん否應言はずに道場へ參れとイト横柄に申しました源八郎は餘り突然の事でありますから不思議に思ひ源八郎は思ひも寄らぬ事を仰せられたす私には元町人の事武藝の義は不調法で涉塵いまずから何卒歩蹴辨に預りたう存すると膝下つてすと「貴様は夫では武藝を知んのか武藝を知らずに武家奉公をするとは不覺千萬夫では一本指南致して遣はそう杯と手を取つて道場へ入れました源八郎も今は辭退する身合でないと思ひ望まるゝ儘身仕度もソコゝ小太刀を取つて扣へました然る處門弟等入れ交り立ち替り手合を致す處が此方は既に一刀流の免許ある腕前彼方は未熟な龜井流の門人位ですから何條及びましようや道理もなく見苦しき負を取り果は高弟林甚太夫と申す者迄も只一打に打搦へられましたから初めの氣色は何處へやらで何れも源八郎を尊敬致すように成り是より堀口の高慢に引き換へて源八

田宮坊太郎

郎こそ文武両道の達人だと家中の評判ア斯なりましたから堀口に於ては源八郎を憎む事夥多しく何日か一度は勝負を致して彼を打据ぬ呉れんと待構へて居りました折りしも此丸龜の總鎮守なる幸野八幡宮の祭禮に當りまして太守の代参もあり旁非常な賑ひでは座いまずから足輕共も警護の爲めに出張致して固めて居ます此時源太左衛門は一策を運らし今日こそ一ツ源八郎奴が日來の誓を取つてやろうと策を構へて太守壹岐守へ言上いたし秘藏の青柳といふ名馬を拜借いたして遠乗を致し歸りに幸野八幡へも参詣いたしたき由を願ひました何が扱殿には素より伊豆愛の堀口ですが早速承諾に相成りましたが畢竟是れより源太左衛門如何ある好策を以て源八郎に恥辱を與へますか勝負の次第は次に上ります

第四席

田宮坊太郎

太守よりは勸請の祝儀として一同役人へ酒肴赤飯等を下され組下の足輕共に至る迄も花越を敷ては馳走を取ひろげ皆々奥に入つて居ります處へ堀口源太左衛門青柳の名馬に鞭を當て、故意と其處を乗り通しました其れ故埃りの爲め酒も肴も砂まぶれ併し出頭一の堀口ですから誰一人として夫を咎める者もなく唯心中に憤つて居りますのみ源太左衛門も是では未だ面白くないと思つたか人込の中を再び乗り戻して末座に扣たる源八郎の前を乗り通し赤飯を馬の蹄に掛て蹴飛ばしましたから勘忍強い源八郎も是には勘忍袋の緒も切れましたと見へて埃を拂ひ乍ら「エ、人非人奴と白眼附ました堀口は素より是は一ツの計略で源八郎を怒らしてソコテ不禮討にでも致そうといふ考へでは座いますからイヤナリ馬を乗返し「ナニ人非人の武士なりと……サア誰が事をやすのだと番り附けた此時源八郎は少しも億せず「アイヤ人非人の武士とは問はずと知れた身事と落付拂つ

田宮坊太郎

十六
てやた故源太左衛門は全で火の玉の様です「ヤイ匹夫下郎の分才と
して過言千萬サア其人非人なる譯を聞こうと馬から飛下り源八郎の
前へ詰寄りました源八郎は容姿を正して「左程開度どの仰なればお
咄し致そう全体今日は當社の祭典にて太守よりも酒肴赤飯等を頂
戴し香々共も只今打寄つて其れを開き居る處取りも直さず此芝原は
太守の御前も全様である然るを乗馬にて往來をいたし大切の酒飯
をば馬足に蹴散らし其上當社へ拜禮もいたさず太守に於せられてす
らも代參を立てられしに神前を乗打したもふ事は神を尊ぶの心も
なき振舞是れ畜生も全然の振舞殊に太守より賜りものを故と馬足に
懸けらるゝのは第一不禮も甚しきものにて人たるの道で汚辱らぬ人
非人どやしたるは斯の次第であると辨舌滔々と述べられ文したから
源太左衛門益々憤ふて「己れ足輕の身として出頭の際に向ひ法外千
萬我が一流の槍玉に懸け息の根を止めて呉ん其處動くなど家來に持

田宮坊太郎

たせし二間餘もある大身の槍を追取り鞘を拂つて立ち向ひました源
八郎は自若として少しも動きませんがムザ／＼一命を取るゝな武士
たる法にあらすと思ひ「お望みとあらば勝負も致さんが理もなき刀
には伏し難き故武士の意氣地兩刀の手前相手やしまししようと腰な
る一刀をすらりと引き抜きました堀口は素より龜井流の師範役田宮
といへども一刀流の達人互に秘術を盡して上段下段と切り結びまし
たが源太左衛門は思ひしよりも源八郎の手練の早業に驚ろき愛を專
途と一生懸命一聲叫んで繰出す槍先き源八郎は閃りと体を交し其體
手元へ繰り入つて真二ツに切り附けました源太左衛門も左るもの故
身を開いて拂はんとしたる此時早く彼時遅く源八郎の太刀先眉間に
當りました深手ではありませんが血は流れて眼へ入り無念／＼と云
ひ乍ら其處へ倒れましたが夫れでは全で盲人を打つも全然ですから
ソコハ源八郎見上げたる精神「アイヤ堀口殿夫れでは戦ひ難儀な

らん暫らく勝負は相待つ故に心静に休息して再び立合やそう田宮源八郎は卑怯の勝負は致さんと悠々と扣へましたは天晴なる振舞で座います

第五席

驚いたのは堀口源太左衛門「コリヤア到底尋常な事をして居ては叶はないと頻りに胸に問ひ胸に答へて考へて居りましたが別に克い思案も出ないソコで傷所へ藥杯を附けて己むを得ず再び立向ひました堀口は運の強い男と見へまして戦つて居る最中に源八郎は圓らすも松の根方へ蹴踢き其場へ倒れました得たりや應と源太左衛門踏み込みざま右の肋より左の高股へかけて突きました夫が爲め終に源八郎は果敢なくも落命いたしたが卑怯未練な犬武士とやすのは此堀口の如きを云ふので座いますしよ最初己れが手傷を受けた時には後

を重んじたる田宮の刃を免れしにも關はらず人の過ちの怪我を幸ひとして少しも恥ないのは實に惜みても餘りある者で座います然る處が此事堂殿守殿の御耳に遣入りましたが如何せん一方は足輕風情又一方は淫寵愛の家來の事ですから却て源八郎の舉動を憎まれ源太左衛門へは淫褻美が出たといふ殿様初め餘程間違ひ切居るので座います其上ならず重き役人に對し源八郎不埒の至りなりといふので家名斷絶女房お政は門前拂ひといふのですから克く情なき始末去れと源八郎の妻とやすは中々氣丈の女で未だホンノ此頃田宮方へ娶入したので座いますくれと貞操の志至て深く殊に懐妊して居ります事ですから夫の死体は豫て源八郎の俗縁なる養源寺へ葬り己れは里方へと立歸りました是からお政は當國象頭山金比羅大權現へ祈誓を懸けまして何卒無事に出産いたすように而して敵堀口源太左衛門を討取り夫が修羅の忌執を晴らさせますようと一心不乱に神

田宮坊太郎

頼みを致します其甲斐あつてか月滿ちて安々座のひを解き産み
落したは玉の如き男子で座いますからお政の悦びはすすまでもな
く里方の者共も目出度い事と祝ひました此赤子こそ後に至つて本講
儀の主人公となる田宮坊太郎で座います何故坊太郎といふ名を附
けましたかといふとお政が決して左様いふ名を附けた譯ではあ初
めから只坊よ〜と申して居りまして名といふものも告げないであ
つたのですが近所でも只坊よ〜と呼んで居るのを何つか誰いふと
なく坊太郎といふ名になつて仕舞たので座います誠に通者に成
長いたしてハヤ七八ツの頃に相成りましたが兎角世を忍ぶ身の上萬
一敵源太左衛門に源八郎の一子ある事でも知られたなら夫れこそ又
如何な禍が起るやも知れせんから終に養源寺の和尚に頼み込み第
子といたして貰ひました……是迄淨瑠璃本や何かには坊太郎が座に
なつた真似をして居つたを乳母のお辻が心配して金比羅様へ祈誓を

田宮坊太郎

悪けたなこの事が座いますすければ是は跡方もなき事で候になつて
作者が一の狂言に仕組だ筋で座います故念の爲め申上て置きます
贅言は扱置きまして坊太郎は佛門へ入りましたが幼な心にも父の
を討たうといふ事は忘れせん如何かして一日も早く本望を遂げた
いと夫ればかり思つて居りますすければ何を申すにも先きは師範で
も致そうと云ふ龜井流の達人で座いますから夫に優つた師範の
儀を極めなければ矢張り返り討ちに相成るは知れた事夫のみならず
堀口は四國九州にて一人といふ名人だと常に言つて居るからコリヤ
ア到底此地に於て劍術位ひを覺へた處が追付ないと早くも考へまし
たは中々惘發な少年であります

第六席

養源寺の和尚は坊太郎が其様大望があるとは知りませんから早く

田宮坊太郎

を獲して後には天晴れ名僧に仕立てたいと教訓致して居りますが何分にも經文杯を厭ひますと言つて何事も教を守らん譯では伊座いませんからマア一日くど其儘に過して居りましたハヤ坊太郎も十四歳の春を迎へました但其年の三月十九日とヤせば此生駒家に取つては大事の伊先祖祭りの日で伊座いまして何れも菩提所ある養源寺へ参詣致します此日は家例に依つて武術の野試合があります夫れ故堀口源太左衛門も門弟等を連れて参詣いたし暫く寺に於て休息して居りました併し此通り混雜いたして居ります事故萬一の事でもあつてはならぬと足輕頭土屋甚五右衛門は寺へ出張に相成つて居りますが兼て和尚とは至て惡意の間柄ですから四方八方の咄し杯致して居ります其折坊太郎は側らに大人しく座つて居りましたから「時に此小僧は未だ弟子入を致して間もないかして若衆姿で居るが何人の俸であるかと尋ねます和尚は聲を潜めて「此尋ねお咄しはヤラますが實

田宮坊太郎

は十餘年以前不慮の死を遂げましたる田宮源八郎の遺れ片身では座いますと承つたる土屋甚五右衛門大に驚きいたく田宮の死を哀れみ坊太郎を膝元へ呼びまして「坊よ俺は屋敷の伯父だ程に折々遊びに来るがいとヤして色々咄を致して聞かせます處が利功な坊太郎では座いますから非常に甚五右衛門の氣に入りました斯る處へ多くの侍等は何れも仕合の場へ参りますので寺を立出でまするを見送つて居たる坊太郎は一々甚五右衛門に其姓名は尋ねますが中程に居つたる大兵にして鬼鬚のある人はと尋ねましたる時に「ア、は堀口源太左衛門とヤして當家の師範役だと言ひました聞より坊太郎は忽ち顔色變つて其後は一向口も開きませんでした夫れ故甚五右衛門も大概悟つて是れは若しや敵討の大望でもありやア爲さいかど内々腹では考へて居りました其内に何れも仕合の場所へ退けましたから坊太郎も余儀なく寺へ變つて居りますと折しも朝より催したる春雨が頰りに

降り出しまして養源寺は二度の雨舎りとなりましたからア其混雑
は一通りでは座いません何れも思ひくの咄しを致して雨の晴れ
間を待つて居ります 甲「ドゥマイ武田氏今日の試合は……」 乙「何日
も乍ら貴殿の腕前には感服するよ今日も三番勝負で三番乍ら美事な
勝を得たといふのは中々上達したものだ 丙「左様さナニソ羅井流
の二代目を嗣ごうといふ勢だから大したものさ 甲「ソイヤ」 昔な左
様いふけれど俺は羅井流などは真平だ 乙「夫ア又何故に……」 貴公の
腕前であり乍ら 甲「高い聲じやア言へないけれど堀口先生は四國一
だとか云ふがソリヤア達人にやア相違ないけれど未だく天下には
名の高い人は澤山ある先づ第一に柳生但馬守とやまては流石將軍家
の師範役天下に一人の名人で彦座るし其外淺山一傳齋羽賀井一心
齋に於ても無双の達人であるが今は先づ柳生流の上を越すものはな
かるうと種々武術の咄しを致して居るのを聞及んだる坊太郎は心の

内に大に喜び敵を討つには是非共柳生但馬守へ隨身しなければなら
んといふ考へを起す是も一には金比羅大権現の利益と彼方へ向つ
て伏し拜みましたが爰に坊太郎の身の上に一ツ難儀の事あれ一寸
休息して上ります

第七席

お咄しも追々進みますと共に坊太郎も成人いたしましたして養源寺の弟
子となつて居りましたが親父の敵を討ちたい一心で彦座いまして母
諸共に讃州象頭山金比羅大権現へ祈齋を懸けました其利益か爰に武
術の師範役として尤も高名なる柳生但馬守の咄を餘處ながら聞きま
したから是こそ師と仰ぐに不足なき者と思ひ是非共江戸表へ上りた
いと思ひましたがナニソ羅井流以上も隔つたる處へ年端も少
年が頼りの人もなき一人旅只今で言ふと丁度十四五の小供が一人で

田宮坊太郎

洋行でもしやうと云ふような物で大抵の大人にも行き惜い處で多座
います夫を一人で以て出懸けよう云ふのですから流石敵でも討た
うといふ者は小供ながらも魂の遠つたもので多座います併し一心疑
つては職をも徹す世の例へで終に夜に紛れて養源寺を立退きました
折節土屋甚五右衛門も江戸在番を仰付けられましたから日頃懸念な間
柄とて暇乞旁住職の處へも参りゆへたが實は坊太郎は此事を餘所な
がら承知致しました夫で幸ひ江戸へ行くには此人を密に頼むよ
り外はないといふ考へで多座いました此時坊太郎は甚五右衛門から
出發の用意の事探聞てありますゆへ母にも密かに委細を語り夫から
九龍の淺へ至り甚五右衛門の乗る船へ人目を忍んで乗込み積荷の間
へ隠れて居りましたのは海上遙に行つた頃頼込もうといふ精神であ
つたので多座います處が天の助けか金比羅權現のは利生か其計略が
圖に當つて甚五右衛門も江戸表迄は連れて行てやらふ斯う沖合へ出

田宮坊太郎

ては仕方がないと平常可愛がつて居る坊太郎の事とて快く承知を致
しましたが篤と其不心得を諭し江戸表へ着たらば再び讃州へ立歸る
ように呉々も申聞けました夫といふのも坊太郎は利發事とて幾ら
懸念に世話をして呉れる者でも迂濶には大望の次第は咄しません夫
れ故甚五右衛門も只小供心に江戸を見物したいから俺の跡を着いて
來たのだと思つて居つたので多座います海上も恙なく十五日目に江
戸へ着きましたから坊太郎の喜びは例ふるに物なく最早大望も成就
したるが如きの思ひを致しました夫で船から揚つて甚五右衛門の後
へ附いて参りましたが坊イヤ〜是りやア此儘一緒に行く處では
ない先へ落付けば屹度九龍へ送り返されるには違ひない夫れでは斯
して辛苦をし此處まで來た甲斐もないから一層此人込に紛れて身を
隠そうかしらん併し之れ迄深切に世話をして呉れた土屋様の事
であれば必ず跡では心配をなさるには相違ない何したものだらうと思

案して参りましたが、坊ア、左様々々寺に居る時方丈様から伺つた
大効は細董を顧みずとやらいふのは此處だろうと胸に問ひ胸に答へ
て終りに人込の中に紛れ込んで何處ともなく参りました後で土屋も此
事を心付き大に心配いたしましたそうでも座います此方は坊太郎克い
梅に土屋を撤いて仕舞いましたナニッ將軍家の膝元で座い
ますから丸龜あたりから参つた者の眼には唯呆氣に取られる程で暫
しは途方に暮れて居りました其上東西も別らぬ仕末何處が日本橋だ
か何處が兩國だか名前は何處に居ても少しも様子は分らない増して柳
生様は何丁の何處にお出での事やら途方思案に暮れて仕舞ひました
併し古からしすしすすが渡る世間に鬼はなしとかで此處に一人の俵
客がありまして土地赤れぬ坊太郎の様子を見て親切に世話をいたし
始めて但馬守の屋敷を尋ねる緒を得大望を遂るのお咄し次席に譲つ
て上ります

第八席

ニ、昔しからすますが夢は五臓の類ひだとか又は聖人に夢なしとか
云ひまして夢には色々な説も多座います併し聖人に夢なし杯とすて
も夫も萬更當にはなりません爰に天下の副將軍と呼ばれたる水戸黄
門光圀卿に於かせられては毎夜の如く不思議なる夢を多覽になる
神夢吾は讃州象頭山金比羅大權現の神使なりは身常に金比羅大權現
を信じ天下の補佐を致さるゝに依り權現にも其信を感じ賜ひ一人の
童子を托さるゝ此童子には大望のある者なれば身と柳生但馬守と
心を合せて守育て未々を見届けらる可しと聲高く聞ゆるト見ると
白髮の老人が一人の童子十二三歳ばかりなるを左りの手にて抱き上
げ枕元に立つ光圀卿も不思議に思召まして枕を揚げやうとする
と之れ南柯の一夢にして四邊には何もない斯くの如き事三日三夜光

田宮坊太郎

因卿も餘り不思議に思召しましたがナシ。天下の副將軍とも仰る。名君に渡らせられますから別に氣にも留めず。家來にも夢咄しもなく相變らず金毘羅様を心仰致し。光圀柳生但馬守とも心を合せて養育致せどあるからにやア何れ但馬守にも斯様なる神夢を見たであらうがソウすれば屹度先方から尊ねに參るには違ひない何れ是しきの夢一ツで彼之さはぐには至らないと其儘にして置かれる此方は柳生但馬守宗矩……此のかたは存じの通り一刀流の奥儀を見破る柳生流を網出して天下の導師範役とまで用ひられたる不思議なる劍道の達人で座いますすが是又光圀卿と全じやうに白髮の老人が十二三才なる童子を左りの手に抱き柳生公の枕邊へイミ。神使我は讃岐國象頭山の神使なり其方は常々金毘羅大權現を信じ武道を磨くに依つて權現にも其誠心を納受ありて一人の童子を授け賜ふ此童子は身に大望のあるものなれば其方と水戸中納言光圀と心を合せて守育

田宮坊太郎

て劍道を教へやす可しと聲高らかに聞ゆるかと思へば忽ち夢は覺ました但馬守も最初は別に何とも思はず氣にも留ては居られませんかつたが之も全じく三日三晩と云ふものは全じ様なる夢を見ましたソコで大に不思議に思召され。但馬殊に依つたら之は正夢ではないかしらん何しろ此様みとを家來共に咄すのも如何なものだが兎に角相談して見やうと翌日老臣を招いて夢の事をシカトとお咄しがある此時藤田惣右衛門とやして柳生家に於ては功勞のある家來ですが但馬守より此咄しを承つて。惣夫は全く金毘羅大權現の咄告げで座いままやう君には豫てより劍術の夢名譽なれば其童子に指南して首尾克く敵を討たせよといふ咄告でしやうと考へられすが併し水戸の夢館にも心を合せて養育致せどある其儀は誠不審の至り此事に就ては何れなにかの驗しもある事やしやうから先々水戸様と夢内談遊ばされて夢館の思召をも伺の方然る可きかと存じます

三十一
が此儀は如何なるものでございませうか 但馬ウム成程何様其方の
すす處も道理至極就ては其方更に小石川の邸屋形へ参り右の夢を
上げ水戸殿の思召をも伺つて参れ 惣ハ、ア承知仕りました然らば
之より直ちに邸館へ参り目見へを願う事に致しませうソコで
前を下り供一人連れまして惣右衛門は水戸の邸館へ参り目見へ
を願つた光園卿に先夜よりの靈夢もある事であれば定めて此事で
参つたんだなど察察があつたので早速目見へ仰付けられたナニ
。時の副將軍と仰がれる君でございませうから中々容易に目見へ杯
の出来可きものでない惣右衛門は謹んで平伏いたし主人但馬守云々
の神託があらまして餘り夜毎のやうに全し夢を見られますからと
靈夢の次第を委しく言上いたし 惣近頃愚痴の至りではございませ
るが餘り不思議でございませうれば萬一や邸館様にも何ぞ告げても
ございませうやと但馬守のや付け夫れ故畏れ乍ら推察をいたしまし

てございませう光園卿は委細の事を聞し召され 光園予も先夜より全
し夢を三晩まで見たが其方のすす通り柳生但馬守と心を合せ養育い
たせとの事此方より但馬守へ尋ねに遣はらうと存じて居つた程であ
る去り乍ら其童子は何れに居る事やら更に解らず致すが若し其方に
て何ん予心當りがあつたなら早速にやして参るが宜い又此方にも其
驗しがあれば早々やして遣はらうと有難き仰せ……ソコで惣右衛門
は夢を聞はつて早速前を退き柳生の邸を指して歸宅の道を急ぐ
程なく屋敷の門前まで來懸つた處が十二三歳ばかりの童子が門前の
辻番の處に立つて居て「柳生但馬守様のお屋敷は何地でございませ
やうかと町噂に尋ねる 辻番其邸はスグソコに見ゆる門のあるの
がお前の尋ねる柳生様だ」左様でございませうか何れも有難う存じます
……此の咄しを聞らずも通り懸つて聞き及んだる惣右衛門はモシや
と思つて童子の様子を見る處が辻番人が教へた通りに通用門を差し

て行く。惣「コラ小供や」「ハイお呼びなさいましたか。惣ア、呼んだのは俺だが今お前が尋ねる柳生但馬守様といふは俺の主人だ」「左様で座いますか……」惣「ア又お前は柳生様に如何なる用事があるのか」「私しは遠國の者で座います。柳生但馬守へ座願ひの儀が座います。故に此の度座當り地へ罷り出ました。惣夫して其願ひと云ふのは如何なる儀であるのか。俺は今も咄した通り柳生様の家來で藤田惣右衛門と申す者じや咄しても差支のない事なら咄して見ることが宜いと親切に尋ねる。」「ハイ有難うは存じますが此儀ばかりは何卒座直に座願ひ申上度う座います。扱は惣右衛門心中に合點いたした。惣此者こそ正しく靈夢の童子に相違あるまいと考へたから。惣夫じやア俺と一緒に來るが宜い殿様にも座目にも懸れるやうに取計らつて遣らうから……」と世にも頼母しき惣右衛門の言葉童子も願ふでもない幸ひと思ひけん。「何分切望座願ひ申しますと惣右衛門の跡

に附いて柳生の邸へ参り愈々但馬守に對面を致しますが畢竟此童子は何者で座いますしやうか次席のお楽しみ……」

第九席

人の一心程恐ろしいものは座いません。坊太郎の母お政は金屋羅様へ心願して何卒首尾克く本望を遂げられるやうにと一身を抛つての祈願神も其誠心に感してや坊太郎は恙なく江戸表へ参る事が出来ました。一ツは金屋羅様の座利生を蒙つての事。又水戸のお屋形といひ但馬守といひ夢枕に立つて坊太郎の事を夫とはなしと頼むといふのも之れ又金屋羅様の座利生だ……克く世間の人が申します苦しい時の神頼み……此様事じやア神様も座利益を授ける事が出来ませぬ。一心を籠めてこそ神も佛もあるもので座います……冗口は扱置さ。惣右衛門は柳生邸の門前に居たる童子をば一先づ我家へ連れて戻り

三十一
其方は遠國より當屋敷へ尋ねて参り殿様へ直々に願ひたいと云ふが夫は何いふ仔細であるのか俺が取次をして遣らうから委しく其譯を囁すが宜い「夫はく誠には情深いお方様にお目に懸り千萬有難く存じます私事は讃州九龜領の百姓の侍で名を坊太郎と申し父は私しが母の胎内にある内死に別れましたが父の臨終の時天下の賢人は柳生但馬守を置いて外にない因て胎内の子が男子ならば成長の後柳生様に侍奉公を致させよと云ふ遺言であつたうで座います此事を母よと委細聞きましたゆへ切望柳生様へ侍奉公致したいと在所の鎮守なる金屋羅大権現へ母子共に祈誓を懸け一心に念じて居りましたか只今斯して柳生様の御屋敷へ参りますのも偏に金屋羅様の御利生かど存じます此上は貴君様の御情で殿様へ願ひ下され侍召抱へ下さる様に相成りますれば有難き仕合せに御座いますと涙乍らの頼み惣右衛門は是を聞いて心中甚だ感入り惣如何にも其方の願ひ

三十二
の筋では殿様へ侍召抱へに相成るやう致して遣はそう先づ夫れまで寛く休息を致せと我家へ留め置きました此童子こそ即ち前席より侍召されました田宮坊太郎で侍座います惣右衛門は夫れより直様但馬守殿の御前へ出て水戸様の御せをば明細に述べ且又先刻立戻りの御侍門前に居た十二三歳の童子が當侍屋敷を尋ねて居た故一應家へ連れて参り様子を聞いて見ると讃州九龜出生の者若し御霊夢の童子ではないかと暫らく休息をさせて置きましたから御前へ侍自通りの上委細お尋ね下さるやうにと事細かに言上いたした但馬守は之を聞かれ但夫は不思議なものと早速召連れて参れど之から致して坊太郎は惣右衛門の紹介にて但馬守に侍目通りを致し但切坊太郎委細の事は惣右衛門から承知致したが金屋羅権現の利生を蒙つたからとはいへ永の海山を越えて遙々江戸へ出て来るとは殊勝の至り就ては其方何か望み事でもあるか予も柳生但馬守だ思ふ仔細がわ

るならば包まず明すが宜い充分力にもなつて遣らうから 坊有難き
涉意を蒙り千萬番なく存じたてまつりますと云ひ乍ら四邊に心を配
る様子 但、ハ、ア之りやア敵討たな人目の多きを厭ふと見ゆるわい
……と心附きになりましたゆへ「コッヤ執れも遠慮いたせ……」近
習井に惣右衛門も一先づ前を退く 但、サア遠慮は入らぬ其方の心
中を打明すがい、坊太郎は有難涙に暮れ實は是々云々にて父源八郎
は堀口源太左衛門の爲めに無惨の最期を遂げし事より伴つて養源寺
を退出し土屋甚五右衛門の情に依つて江戸へ参りソウして柳生侯へ
侍奉公を願つて劍術の一手も覺ぬ首尾よく本望を遂たいと云ふ事の
一伍一什を語りました但馬守もホト、其精神に感心いたし 但、實
に大丈夫も及ばぬ魂其方が孝心は必ず天道も守り賜ひて仇討をなす
事も出来やう氣を永く時節を待つが宜いと之から一間に休息をさせ
て翌日に相成ると兼ての涉約束もあります事故坊太郎を召し連れ水

三十九

戸の形へ機嫌伺ひ旁参願いたしました處早速の對顔……一
跡水戸様は大總但馬守を最負に遊ばされ將軍家へも推舉上た程
でありますから 光圀但馬賦に久々やアア 但馬ハ、ア麗はし
き尊顔を拜し恐悦至極に存し奉ります……と之から金毘羅權現靈夢
の件より坊太郎を召連れ参つたる事迄落もなく上りました光圀卿も
早速目見を仰付られ 光圀は柳生家へ奉公致したき心願の由だ
が夫は如何なる仔細かとお尋ねがあつた坊太郎はハツと平伏に及び
之から金毘羅權現へ祈誓を懸けし事より大望の次第を言上に及びま
すので光圀卿もイト不惑に思召され厚きお言葉賜はつて但馬守諸
共に木挽町の道場へと立歸りました

第十席

坊太郎は改めて但馬守よりお妻を賜はし師弟の約を結び晝夜の分ち

三十九

田宮坊太郎

なく稽古をいたしましたから僅か星霜七ヶ年の間に上達した何ニ
口父の仇を討とうといふ一心相手も槍術の達人であつて見れば迂闊
な事では逆も父の妄執を晴らす事は出来まいと寝る目も寝きに稽古
を致す但馬守に於かせられましても金毘羅権現の傳告げといひ殊に
は水戸様からのお頼みといひ又自分も何か首尾よく仇を討して遣り
たいといふ心得であるから自身に手を執つては教訓に相成る處へ
持つて坊太郎が熱心ですので忽ちの間にグッと腕前が上達しました
外の者が三年も稽古をしなくては出来ない處を坊太郎は僅かに半年
位で夫より優る腕前になつた斯いふ風に挽ます倦ます竹刀を離した
事のないといふ程の心懸けだから但馬守も實に歎へる張合がある斯
いふ工合に一年一日の如く但馬守の家に召抱へられ四年の星霜を
閱し最早當年十六歳の春を迎へました成日の事柳生侯に置かせられ
ては坊太郎を一間に招き 但其方も當年は最早十六歳吉日を撰んで

田宮坊太郎

元服を致させやうと存じ居つたが今日は幸ひよき日柄であるに依り
元服を致すが宜いと雖も其處へ一通りの禮服を整へて近侍の者に運
ばせる坊太郎は大に喜に 坊私事は十二歳の時よりお家には奉公す
し格別の厚恩を蒙りし上のみならず劍道を傳指南下され其上又元
服迄も仰付られます段重々の厚情更に加至極に存じ奉ります何分
共宜しく御願ひ申上ますと申述べるソコで用意もスツカリ整ひまし
たから但馬守は柳生宗矩の宗の一字を與へ田宮小太夫宗政と名乗ら
せた……ドウも人も斯う立派な名乗り迄も附て見ると大總に貫目の
附くもの田宮坊太郎とやア左して價値もありませんが田宮小太郎宗
政といふと劍術も随分出來そうに思ふ名は躰を願はずとは此處等の
譯でありませしやう……ツイお咄も別途へ外れまして譯はありませ
んが坊太郎も之れより二年の間は再び但馬守が手を執つての傳教訓
でありますので今では高弟四天王と呼ばれる旁さへも手にあますや

うに相成つた柳生侯も之ならモ一充分の腕前假令如何なる名人に逢つても大丈夫といふ事鑑定が就たテ其赴きをば水戸様へ言上いたしましたから光圀卿も大に悦び將軍家へと内願すして生駒家へ内命を以て堀口源太左衛門を取逃さぬ様にどの沙汰……モ一此通り悉く手順が定りましたので柳生但馬守よりは老臣庄田重右衛門并に高弟廣太夫の兩人附添へ水戸殿よりは檢使として番頭赤松八郎太夫といふ者が附添を仰付かつて愈々坊太郎は讃州九龜へ下り父の無念を晴さん爲め江戸表を出發いたす事になつた水戸様へも但馬守が附添つて沙汰を上ん爲め目見を願ひました處光圀卿にも早速の沙汰顔彦蓋を賜はつて目出度本望を達せよとの仰せ坊太郎は謹んで沙汰を中上御前を退つて之よ一同の者と江戸表を出發いたし讃州九龜へ歸つて母にも對面いたし積る話しを致しました此方は生駒家に於ても公儀からの沙汰とあつて見れば否應す譯には往かんソコで

堀口源太左衛門をば登岐守殿御前へ召されて 登坂今度は公儀よとの内命もあつた田宮源八郎の一子坊太郎歸國致して仇討の願書を差出しに相成つたに就ては最早己を得ぬ處依て明日は幸野八幡の境内に於て尋常に勝負を致せよとの仰せ源太左衛門も一時は大に驚きましたが素より大膽不敵の曲者ゆへに隨んで沙汰を受て致しいよと勝負と云ふ事に相成る坊太郎は爰に年來の本望を達する時節到来と大に勇み源太左衛門も一生懸命龜井流槍術の奥儀を顯はし名乗懸けく暫し勝負も見ぬされと一心懸はたる坊太郎の尖刃に斬り立られ源太左衛門は眞二ツになつて倒れた此れは柳生流竹割の極意だッウで座います爰に坊太郎は首尾克く年來の本懐を遂げ源太左衛門の首を落して養源寺なる父の墓所に手向けたといふ田宮坊太郎孝勇の仇討ニ、之にて結局と致します

田宮坊太郎仇討終

小栗判官

第一席

エ、小栗判官の一代記を言上いたしますが之は昔よと誰しも存じの有名なる事柄でカククリでも祭文でも小栗判官か岩見重太郎かど云はれる位の名高いので伊座います尤も其事も随分お古い足利家時代の事で伊座います至つて博學多才な方で特にお古い足利家の時大名家がありまして至つて博學多才な方で特に武藝に鍛錬で馬術は其中でも得意であつたソツです時に室町將軍義教公はは家督を相續遊ばされたが全躰此方は一旦沙門に身を入れた義圓と法號を改められた方が管領持氏は如何にも夫が不承知であるから義教を廢して將軍職を順當なる血筋

小栗判官

小栗判官

相續させやうとした満重は之を聞いて持氏を諫めやすやうに其業に安せんとする時に俄かに將軍の廢立を致すやうでは唯己の權威を振ふのみに止まつて國家の安否を思はぬの致し方夫より充兵輔佐して將軍職を動かす等の事なく世を泰平に治めるやう願はしう存じますと面を胃して切々に諫言を致す持氏公も管領職にある位な人物ですから決して愚かなものでは出来な夫れ故満重の意見を入れて廢立といふ事は思ひ止まりましたので大に安堵いたしました屋形へ立歸つた處が世の中には善人は少くして悪人の方へは兎角肩を持ちたがるもので伊座います今小栗判官は管領持氏を諫めて將軍廢立の儀は思ひ止まらせたいふ事を聞き及んだのが一色詮秀といふ之れ又小栗に次いで當時鎌倉の政權を取つて居る人物……が兎角兩雄并び立たずイッも

小栗判官

小栗の爲めに名譽をばられて仕舞いますからサア残念で仕舞が
ない。豈己れ小栗奴今に覺て居る折から満重は持氏の意見に逆ひ
と手ぐすね引いて待構へて居る折から満重は持氏の意見に逆ひ
諫言を致したと云ふ事を聞き込んだので機失ふ可からずと直ち
にお目見へを願ひ管領持氏の御前へ出た。監承とますれば小栗
兵衛尉君の心々に背き侍言の上しとの事承れば満重には如何
代とはやし乍ら元々京都より鎌倉へ附けられたもの然らば如何
様な密事を洩すやも計り難い。誠に諫言の趣旨も立たせ却て君
の爲めに涉り不利益の事を上げ其間に京地より人数を繰り出さ
して涉り家を亡ぼさんとの所存かも知れません然る時は全く彼
れの爲めに計らるゝも全然猶豫は涉り無用早速決断あつて小栗
満重を打ち取り禍の根を絶たなければ終には當家の一大事と相
成りますと巧みに辨を揮つて持氏の眼を眩まして仕舞つたサア持

小栗判官

氏は之を間に受け、讒言杯と云ふ事は更に氣が付きませんから一
府邸立腹遊ばされ早速人数を繰出して小栗の館へと攻め込んだ
り。満重は不意の出来事なれば大に驚き、満ア、此兵衛尉に
何の罪あつて猥りに我館へ兵を向けられしか仔細を承はらんと
大音聲に呼はつたり。此時寄手の大將と思しき者馬を進めて大
將管領持氏公の下知にて一色殿の参意見を採用せられ當家に
仇なす小栗満重を討取れとの事故に軍馬を催促致し當館に向つ
たり。甲を脱いで降伏致せば善し左なきに置ては直ちに征濃さん
ヤア、返答如何にと之又大音聲に呼はつたる事にてあれば満
重も忽ち悟つた。満ア、之は他が諫言をしたのを聞及んで持
氏公に媚ひ平常の腹癒せをしやうと讒言を構へた一色奴の細工
だ。モ、斯なれば據せよろなし。寄手に刃向つては却つて身の錆を
願はず如きもの事、そ潔よく腹掻切つて潔白なる魂を願はして呉

小栗判官

れやうと流石大丈夫の満重で座いますから一間の内へ駆け入
のて美事最期を遂げました故寄手は勝鬨を擧げて圍みを解き兵
を引返した

第二席

處が本國小栗の城には一子小栗小太郎助重は父満重が不慮の災
難に逢ひ自殺致した杯と云ふ事は更に知らず只管文武の道に身
を委ねて居ると或日の事候しく一人の郎黨イキセキと城門へ
懸つたが余り晝夜を兼ねて走つた見ゆ大手の門の處にてパツ
タリ倒れました驚いたのは門番だ甲、チイ、近藤何だか一人
の若黨が頼むと云ふかと思つたらバツタリ倒れて来て見れ
ば此始末だ全体何した事やら異体が解らない乙左様さ仕方が
ぬい門の處へ来て倒れて見りやア此方の災難だ殊に由つたら

小栗判官

瀧瀬かもし知れない頭へ草履の切れたの靴して遣れ左様して面へ
水を吹懸けて遣つたら其内にやア息を吹き返すだらう甲、元、疾
往つちやア往ない瀧瀬と目を廻して倒れたのは禰が遠はう瀧
瀬なら口から泡を吹いて目を釣士げて居らア……全で遠うじや
アないかど門番は彼是と評議いたして居る處へは家老の後藤様
……此方は兵庫助高とヤして智仁勇の三徳を備へたる小栗の名
物男と云はれた位な方です……今急登城で門へ差し懸ると此
始末門番は何れも土下座を致す途端にウーンと彼の若黨は息を
吹き返しましたけれど眼ばかりバチクワ遣つて居り交して全然
鳩が豆鐵砲でも喰つたやうな有様ダガ當人は中々氣が張つて居
りますからチロイツと見るとお供を連れて涉老職とも思しきも
のが涉立關へ懸らうとする此有様を見るより例の若黨は一散走
りに跡を慕ひ若、注、遣、……門番は呆氣に取られて仕舞つ

小栗判官

てポンヤリ立つて居るは家老後藤兵衛助高は注進とは容易な
らざる事と後藤を振返つて見ると唯今門の側に倒れて居た若黨
だハッと思つて供頭に何かは附けに相成り自分には其儘は殿
へ成らせられる跡に残つた供頭は直ちに其若黨を取つて捉へ様
子を聞くと只一大事の事故急には老職の方に申上たいといふ其
爲りの注進だどあり申すから供頭も黙つちやア置かれぬ早速
此事を伊家老まで申上ると家老然らば對面いたすに依つて庭
へ廻せソ……と云ふ伊沙汰早速は殿の扣へ所……即ち只今で云
ふ應接所だ……其應接所の庭へと通しました若黨は庭へ廻り
如何にも心急いで居ると見へ若早速注進申上す一大事で
伊座います家老ナニ一大事……實は何か異状のある事と存じ
自身對面致すのじやシテ一大事とは心元ない早速夫にて申
聞せいで若ハ、ア實は昨日鎌倉のお上屋敷へ管領様の追手が懸

五十

小栗判官

り大殿様は伊家殿今にも書お懸へも兵を向けらるゝは必定速に
お覺悟あつて然る可と存じますと懐中から書附を出して若黨
之は若殿様への伊家直々にどの言葉では伊座います家
老様より取次を願ひます之さへ差上れば拙者の役目は相済ま
した之より直に鎌倉へ引返し大殿様の跡を追ひ切腹致す伊座
いましてやうハ、ア伊座申す立去らうとする流石の家老も
之には驚きました自分からして願いだら夫こそ一家中鼎の沖
くが如き有様になるだらうとワツと心を静めて家老其方の申
す處は確かに聞いたがナニッ容易ならざる一大事又此書附も
若殿様へ取次いで遣はす之も正に預つたが之より鎌倉へ引き返
すと云ふのも余も早まつた事暫らく一間に於て休息致し若殿の
伊下知を相持つが宜からうと云ひつゝ座をお立に相成り早速小
太郎助重殿へ右の赴きを言上いたし何か知れぬが書附を差上る

花下

と今度の事は父重公の御遺言状では座います助重も御しは
呆然として途方に暮れたる有様ですが助重や助高今にも管
領の下知として寄手の来るは必成ては早速其手配を致し一度
此城を落るも再び快復を圖る父の安軌を晴るにやならん
どしたは首葉軍助高は愛に及んで如何なる計略を工らします
か開は次第に譲りて詳しく言上仕りますと一才一喫御免を
蒙ります

第三席

今此場合で立つてはと思ひますから兵庫助高は實に落者は
らつて居る助高如何にも事が不意に起つて幸くも若葉の注進
にて此有様を知つたは何よりの幸願々が寄手の軍勢が来たか
らとて空しく城を明け渡すも残念ト云つて女小見や老人達は却て

足手纏ひになるからして事を新う致したら如何で御座いましや
う今小栗の十勇士といつて御り作ら拙者共に十名の勇士……一
騎千の武夫が掛へて居るから外の家來等は一先づ此場を落ち
逃びさせ若殿様を加へて十一名當城に残り敵の詰り寄せし頃を
見計らつて切つて出で何國へなりと落延びて再舉の計をなすよ
り外はなからうかと考へます此城は如何で御座いましや
助重成程夫は面白からう然らば早速左様取計らへと下知があ
つた兵庫助高は急ぐの聲城の囀りやアない忽ち臣下を大廣
間へ急のお召しで御座いますから禮服着用にも及ばず直ちに御
仕せよとの願を述べた何事ならんといふ不審に思つて飛ぶが如
くは何れも大廣間へ集まる申竹内さん何の御用でしやう非常
者の儘で拙者は出て参りましたが何でも構はないから直ぐに仕
掛致せといふお解れせまから取る物も取り取す参りました乙

小栗判官

何だか承れば大變な騒ぎが起つたとき云ふ噂さ夫れ故手前共は
存じの通り内職に厭の繪を書いて居りますすが此通り手も墨だ
らけで直ぐ懸附けました 因ドレでか貴郎の顔は全然五色で塗
つたやうだ……頭は白髪で顔は黒いし處へ鼻水をたらして居て
赤だか青だか繪具が附いて居るから甘く五色の取合せが出来て
居ますよ 乙は元敵ばかり何時も口の悪い山口さんだが夫りや
ア又余まり劣敗すぎますよ 杯と彼方でガヤ 此方でガヤ
正逆に鎌倉のお上屋敷で大殿様が切腹遊ばし軍勢が當城へ詰
め寄せるると云ふ夫な事ア知りませんからワイ 云ひたい事を
鏡舌つて居る處へ出仕になつたる家老後藤兵庫助高一段高
き處には小栗小太郎助重威風凛々として扣へて入らせられ別
勇氣の挫けた姿も見えないといふのは天晴なる名將で傍座いま
す一同の者も忽ち水を打つたる如くシイーンと致して仕舞つた

小栗判官

此時家老後藤助高腰押し進み 助重今時俄かに登城を促し一同
と呼び集りしは別義ならき當上屋敷に入らせられる大殿様は
者の首に依つて取なき伊最期其上ならず寄手の軍勢當城へ取詰
めるどの注進依つて一先づ當城を落廻り再舉を計るの決心若殿
様よりの下知であるから一刻も早く女子供や年寄り此場を
遁延び敵の刃に觸れて非業の死を遂げぬ様此義を申渡さん為め
に急の出仕を觸れたのじやと思ひ懸なき寐耳に水の大噪動サア
大廣間に聚つた血氣の連中は腕を擦つて怒るし老人輩は涙を流
して大殿様の逝去を悲み再びワツ ンガヤ ン 噪き立た此時
小太郎助重殿には 助重ヤア一同の者其驚きは尤なれと一旦此
場を落延るといふも實は再び旗揚の時節を待んが為め生中當城
に立籠つては敵は大軍味方は小勢討死より外致し方なし死すべ
き時に死せざれば死に勝る恥われを決して命は輕くしく失ふ可

小栗判官

もきのに非ず此處の道理を聞き分けて一先づ落ち延びて呉れるやうにと情の籠を思召し……一同の者も大殿様が逝去の後願ひは若殿様一人では座いますから言葉に背くものは一人もなく涙を飲んで一同下城に及び思ひ……に立退きました今は心易しと十勇士の面々若殿小太郎助重公も今や敵兵押寄せるかど手ぐすね曳ひて待つて居る……

第四席

鎌倉方の軍兵はナニッロ常州までも下る事ですから充分の用意に及んでいよ……小栗の城下を去る二里あまりの處へ陣を取忍びの者を入れて様子を見はせるとシーンとして別に何の備へもないソコで此事を陣中へ告げると大將切は未だに鎌倉の事變をも知らずまて備へなきと覺わたり深みに縋んで乗取れや

小栗判官

者共と一同ヒタ押して攻め懸けた城中に於ては十一人の勇將狂卒遠く陣太鼓の響くを聞きては扱は愈々押寄せたりと覺わたり今日を晴と日頃の武勇をあらはすは此時ならんと勇みに勇んで兵糧を遣ひ悉く身拵へをして待つ間程あく敵兵は十重廿重に城を圍んだケレども城門は堅く鎖まてある事故ッウ容易くは攻め込めない助高サア修用意よくば之より寄手に一泡吹かして呉れん各々方は如何ぞや十勇士既に用意も整ひたり……イヤと一同の者は轡を揃へて大手の門を真一文字に押開き無二無三に切り込んだる此時寄手の大將分には桃井島山六角など何れも當時の諸侯の中には屈強なる大將方であるから今や十一騎の勇士が馬の鼻を駢べて陣中に蒐入り決死の覺悟と見て取つたから孰れも遠矢に懸けて射壇さんとした處が一騎當千なら宜いが一騎當萬位の勇士だから僅か十一騎の爲めに目に余る大軍がナゲ

レを打つてドッ……と何れも敗北した大勝、ア敵は僅かに
十一騎汚なし返せ戻せ……と聲を濁らして下知しましたが大
厦の將に殖さんとする一本の善く支ふ可きに非らずでトウ、
三四里の外へ追ひ退けられた助重主従は此有様を見て味方を
願みれば十一騎何れも揃つて手紙を負ふたものもないから天の
與へど大に勇み之より忍び姿と相成つて何地を當ともなく武蔵
を指して落延びましたが之より密かに東海道藤澤驛なる遊行寺
へ立寄り高僧遊行上人に對面の件……小栗判官照天姫の講談
追々佳境に進みます……

第五席

小栗判官といふ外題で讀んで居ますすが前席まで言上いたした
る小栗小太郎助重は即ち世に傳ふ小栗判官の事では座い升から

念の爲め断りやますぞ小太郎助重は十人の家來を引き連れ是
非とも鎌倉へ忍び込んで一色詮秀なり管領持氏なりを殺し父の
仇を討ちたいと思つて居る其頃藤澤の遊行寺に遊行上人と云高
僧があつて將軍家并に管領職に至るまで之れに歸向して居る全
く其徳の高い處を慕ふての譯であります助重主従は素より落人
の世の中を忍ぶ身であるから風にも心を置く身では座います
今遊行寺へ尋ねて參つたといふものは此遊行上人とすは助重
の爲めには俗縁の叔父に當ります夫れ故先方は三界を捨てたる
佛の弟子とは云ふものゝ今小栗家が零落しては助重何となく遊
行上人が頼しく懐かしくなつたから切ては今生のお暇乞とも思
つて對面致したいと思ひ密かに訪れて見ると克い搦梅に在座
であつた遊、珍らしや小太郎……助重叔父上にも機嫌
克く恐悦至極に存じたてまつります 遊、イヤ余り壯健といふ

小栗判官

程でもないがア達者だから喜んで呉れ……ッテ又今度は不慮の災難満重殿もア、云ふ譯其方とて城を落延びて何れにか追逃ひ居つたが實は今日は尋ねて呉るだらうと思つて心待ちに待つて居つた……と云はれて流石の助重も驚きました父上の事は兎も角も吾身の上までと思つたに今日は尋ねて呉るだらうと心待ちに待つて居たと思はれたんで恐れ入る外はない 遊ッテ小太郎十人のお供の衆も之からは其方の爲めに脇腹の臣だ此方へお通しやすが宜いと雖も十人の勇士達も方丈へ通つて上人に目懸ると如何にも聖の高僧であるから自然頭が下るやうな心持が致す 遊時に小太郎之から其方は如何致す積りじや定めし今度は暇を旁立寄つたんだらうが併し中々之から種々な難儀に逢つて随分一命の危い事もあるけれど其れを通り越なければ結局開運と云ふ事は覺束ない夫に十勇士の旁も之れ又小太郎程

小栗判官

ではないが一度は死境に入つて初めて生を得る努力疑う可き事ではない是は今日對面致した拙僧の引出物だ其の積りで退却致すが宜い……時刻も餘り移るから今日の對面は之れ限り夫れ又其内逢はれる事もあるだらう法衣の袖を拂つて立座になつた一同の者は互に顔を見合して居たが死地に入つて又生を得開運の緒に取付くと云ふ上人の言辭に孰れも喜びの眉を開き一先づ遊行寺を立去りましたが途中に於て今度は悉く身拵りを換へ奥州筋の郷士が鎌倉見物に来たといふ風にして鎌倉へ入り込み松倉屋吉兵衛方へ宿を取りました……涉存とでも涉座いましてやうが當時鎌倉に於ける宿屋など、云ふものは何れも其遊女屋を兼ねて居りますので、大名家がお泊りになり其晩お寝間の處を拂ふといふやうな次第で何の事アない表向きになつて營業して居る達磨茶屋だ併し、大名家でも泊るやうな宿屋でなければ決

小栗判官

して善い旅籠はありませんゆへ小太郎主従も遊女屋と知りつゝ
松倉家吉兵衛方へ宿を取つた夫からといふものは今日は江の島
見物だ明日は長谷の観音へお詣りをするとか言つて毎日のやう
に諸方へ出歩行いて見物致して居ります……と云ふのは實は鎌
倉の様子を窺ふのでありませぬ宿屋では其様事ア知りません帳場
から女中に至るまで夫々祝儀茶代を遣はしてあるから克い島が
懸つたど喜んでチャホヤ下へも置かぬ様に大切に取あつかう斯
の如くして一月余りも逗留致したか扱遊女と云ふものに何れも
眼を付けない夫じやア斯いふ稼業をして居る事を知らないかと
いふと夫様でもないと言つて客人の年齢を見ると扱いつれも血
氣壯んなものが多い吉兵衛扱世の中に不思儀な事があるもん
だアソナに毎日今日は何處だ明日は何れへと見物に出懸け
て歸つて来りやア随分酒を飲んで中にやア唄採ふ唄ふ人も見

小栗判官

るやうだ女に手を出さないと云ふナア奇体だ然じやアと云つて
外家へ登つたでもなし幾ら奥州の人間だつて木や石じやアある
めいにと頼むに考へて居たか吉兵衛待てよ之りやア殊に依る
と奥州の山の中に居りやア此方達の眼から見りやア猿も同然だ
何れでも構はねい此方ア錢にせいなりやア宜んだから此奴一番此
間賣られて来たお照をアノ若い息子に勤めて見やう此方から勤
めりやア正逆に否とも云ふめいと亭主は旨い處へ氣が注いた

第六席

ッコで亭主は直にお照を呼んで吉兵衛お前は俺の家へ身を賣
られて来てても只泣いて斗り居て客に出るのは否だといふから終
今迄打捨つて置いたけれどソウ何時までも捨ては置かないゆへ今
度はアノ奥の座敷に居る若い息子の傍欄を窺はなくてはなら

小栗判官

お供の衆も十や二十じゃア座いますまいとコリやアア俺し
置いて参りまして一寸見ますと克く貴郎方に似て居ます
左様言つては失禮ですが小栗様とでも言はれる物ならば正逆に
見廻りの北村様が拙者共へ出張になり貴様の家に泊まつ居る
鎌倉見物の客人十一名と云ふのは常州小栗の城主小栗太郎と
申すもので尋ね者に成つて居るといふので今日探は人相書を
置いて参りまして一寸見ますと克く貴郎方に似て居ます
左様言つては失禮ですが小栗様とでも言はれる物ならば正逆に
お供の衆も十や二十じゃア座いますまいとコリやアア俺し

小栗判官

の推量で座います就ては旦那様へ俺しから取持致したい者
がありすが何とお聞下さいますまいか小太郎助重は只今の
人相書の咄しを聞き及んでハッ胸には堪へましたけれど大丈
夫の侍であるから面色にも顯はさない助重コリやア亭主取持
ちとは何だか知らんが有難い事じゃ何を取持つて下さるの
か吉兵衛へい何だか誠に年甲斐もない事を申上る様では
侈座います素々手前共は宿屋兼帯の遊女屋で侈大名方の泊
りのせつには必ずお寝床の伽に一人宛差上るので侈座います
貴郎方はお若い身空であり乍ら實にお堅ひもんだ遊女杯は見
さも致しませんと云ふのは天晴なもの處で手前此頃一寸した事
から一人妓女を抱へましたが未だ誠に未通女の事でお客へ出
さいふ陣にも参りませんけれど初物は七十五日生延びるとやら
切望旦那様に差上たいがと存じまして押附がましう侈座います

が伺ひ旁出ましては座います 助重ホ、一左様か夫は宜い處へ
氣が附かれた見た通り不粹ものだから此方から早速一ツ其女を招
夫で差加へて居たんだが、亭主の取持ちなら早速一ツ其女を招
んで貰ひたい 吉兵衛長りました左様ならば直ぐに之から準備
を致させまして……と其場を退りお照には勢一パイの化粧を
せて再び小太郎主従の座敷へ参り 吉兵衛エー旦那様何卒不
法者ですが何分は目を懸けられまして……とソコで亭主は充分
辨間を叩いて旨くお照を嵌め込め手袋を考へました

第七席

小栗小太郎は素より色に溺れてお照を側に侍らしたる譯ではな
いがナニシロ鎌倉からのお尋ね者ど聞いては何分油断が出来な
い余り堅く仕過ぎて仕舞つても反つて疑を受けると吐き

間に思案を極めて仕舞つたソコで亭主に申付けて云ふが僅にお
照と云ふ女を席へ招いた處が助重は驚いたケレども亭主の手前
正逆にソウでも言へないから素知らぬ顔をして 助重どうも亭
主辱けない大分克い代物を取持つて呉れて……と大に歎びッ
コで又々大酒宴を催した程なくお開きとなり助重公はお照の手
を取り一間の内へ成らせられたが家來の者は大層心配を仕て居
る 甲さうもア、して未だ若い身空でお出遊ばすから若しや又
徒然の餘り女に溺れるやうな事があつては一大事殊には既に人
相書迄も持つてお尋ね者に相成つて居るとの事決して油断は出
来ない場合 乙左様々々如何にも夫が氣懸りだから殿には其様
事は一向平氣に渡らせられ汚らばしい遊女と共に一間へ成らせ
られる杯亭主も亭主だ實に悪い者をお勤めやたらも頻りに
心懸して居る此方は小太郎助重はお照の手を取り一間へ入り

助重「ナア珍らしや照天姫……」
照「ア、我君様……」と云ふも近邊
を憚かる忍び聲。助重「シテ」
女屋へ身を沈め遊ばせどもならせられしか
涙の種大河内の城は敵の爲先に攻め落され妻は母様と一緒
退く途中野武士の爲めに母様は敢なき最期妻は此遊女屋へ身
を沈められ毎日泣いて居る内此間中より奥の一座のお客と云
ふは小栗の城主小太郎様と承り飛立程には思ひました未だ
お顔を見る事も出来ず只胸を焦して居る處今日主の申しすに
承知いたし今宵始めて孝主の心に從ひまして座いますと涙な
がらの物語り小太郎助重も不惑の者と思召したが扱ッコは堅い
もの夫ではと云つて頼りに同衾などは致さない其晩は臥床を別
にして休眠ましたすが扱聖る日に相成りますと後藤兵庫助高を密

かに召し賜ひ 助重「如何じや兵庫昨夜の婦人が解るか 助高之
は恐れ入りましたモ一素惚けは何卒伊勢を蒙ります 助重「イヤ
イヤ惚け處ではないアノ女を知つて居るかとやすのじや 助高
左様と云ふやら見覺ぬのある美人で……」 助重「ウ、見覺ぬのあるの
は尤じや……」 兵庫「……」 那女は大河内の城主より幼年の内小栗へ
遣された子が許嫁の照天姫じや 助高「道理で見覺へのある婦人
だと思ひました……」と兵庫も大に驚き入つた 助高「ア又遊女
に身を沈めると云ふは何か深い仔細が座いますか」と膝押進め
て問懸けたり 助重「夫は仔細のない處ではない……」と扱掴んで
大河内の城は敵の爲めに改め落され己れは母と共に立退く途中
野武士の爲めに生擒られ母なる者は無惨なる最期を遂げたと云
ふ事を咄したから兵庫は益々驚きましたけれど 助高「ア見れ
ばイツ迄斯うして置く譯にも往ないと云ふんでは是から亭主吉兵

術に談判しお照の照天姫をば身の代金を出して之を購ひ改めて
兵庫より若殿へ勸めたから茲に二人は其奇遇を歎び二世の確め
を致しましたたが驚愕の夢未だ醒かならざるに先だち十勇士の身
に災難の及ぶといふ件より仇一色陸秀を討つのお咄し次席に譲
つて辨じます……

第八席

小栗判官照天姫と云つたら實に名代のお咄しですが其又照天姫
も中々苦勞を致したもので終に見慣れず聞きも及ばざる遊女
屋に賣られるやうな次第ですが兼てより女は両夫に見へざる
しを存じて居りますから況してや朝たに奥羽の客を迎へ夕に九
州の人を送る深き川竹の勤めを致しお客に身を托せる杯といふ
夫様事は幾ら亭主から勸められたつて承知しない事と死んだが増し

だど懐劍おの取り自害しやうとした事は度々です夫れ故亭主も
殆んど照天姫には持て余して居たがト云つて無理に迫れば舌を
嚙切つても死に兼まじき機嫌だから夫とやア玉なしにして仕舞
う詰らない咄しだと思つて暫らく云ふが儘に時節を待つて居る
と幸ひ鎌倉見物の客人があつたから玉を見せての上として旨く
俵込まうとした處思ふ儘にスボンと納りが附いたイヤ亭主は歡
こんだの歡ばないの吉兵衛「ア」之で一肩抜けたコトして
現金で手に這入れれば稼がせるより儲かる始末だ全く那女は福の
神未通女の處が氣に入つたど見ゆると亭主は一人恐悦に入つて
居るが素より小栗主従だと云ふ事は噂にこそ聞いて居るが確か
に左様とは思はないスルと二三日経過と例の市中見廻り役北村
次郎下手を引き連れて松倉屋へ出張いたした亭主は帳場から飛
んで出て吉兵衛之は旦那様お出遊ばせ誠に克いお天氣で何卒

小栗判官

此方へお通り下さいますし、雖も北村は一間へ通り、次郎、初亭主、今日態々参つたのも余の儀ではない、實は此間も咄した通り、鎌倉見物十一名の主従といふのは、確かに小栗の落人、小太郎主従に相違ないから、早速召捕りに向ひたいんだが、何を云ふにも十一騎にて目に余る大軍を破りし一騎、當千の兵士だから容易に手を下す事が出来ぬ、尤も余り激しくないので、決して死やうな事はないが、手足は利かなくなつて仕舞う其處を附け入つて捕へれば、お互に怪我もなかりやア、人死もなしい一番安心な策だが、ドウだ、亭主頼まれて呉れるか、吉兵衛へエ、貴郎方のおたのみなら宜敷う、傍座います、引受けやしましやう、次郎、確と引受けたな、吉兵衛、宜しう傍座いますと云ひ乍ら口の内で「那な毛虫みたいな奴だもの、引受けりやア、何なえらうりをするか、知れぬい……」

次郎、何と云す亭主

小栗判官

吉兵衛「イ、何此方の事……」と之から亭主は一服の毒薬を受取り、密に酒に煎へて一罇の居る處へ掛つて参り、吉兵衛「一程なく灯も附きますから一杯差上たいと存じ肴を改めて只今運ばせまして傍座います、何卒一ツ召上つて戴きたいもので……」一同、左様か、夫りやア、何も心附けは難有な夫じやア、一杯、一杯、かうか、と、十勇士の面々、何れも、藥とは知りません、ゆへ、大杯を以て、備り、うけて居る、獨り、助重公は、腹痛の氣味で、毒を取つても、氣が通まな、い、其、内に、頭、ど、に、便、を、願、ふ、し、て、來、た、か、ら、起、つ、て、小、用、場、へ、参、つ、た、ス、ル、と、照、天、姫、は、密、と、跡、か、ら、附、い、て、参、つ、て、照、只、今、奥、で、閉、い、て、居、り、ま、す、と、今、宵、の、酒、宴、は、亭、主、が、見、廻、り、役、の、北、村、様、に、頼、ま、れ、て、毒、藥、の、傍、酒、で、死、ぬ、程、で、は、な、い、け、れ、と、執、れ、も、手、足、の、利、か、な、く、な、る、位、に、は、な、る、其、處、を、附、け、入、つ、て、探、り、捕、ら、う、と、い、ふ、巧、み、で、傍、座、い、ま、す、ト、ツ、ク、ニ、は、知、せ、や、た、い、と、は、思、ひ、ま、し、た、が、ナ、ニ、ハ、人、目、の、多、い、中、

夫れ故貴郎の事は長谷の観音様へ祈願を懸け腹が痛んで酒を召
上られぬ様に致してと一心に誓を懸けました。がモモ召し上
りは致しませぬ。……之を聞いた助重の驚き。助重扱は亭主
に計られたかチエー残念と齒切を致したがモモ間に合はない奥
の方にハッン、唸り聲さへ聞へる様に成つたから照天姫も夫
れ一大事と實に氣が氣じやアない。照何卒一先づ此場を逃れ捕
手の危難をまぬがれるなうに……サ早く、と急ぎ立る助重も
心は跡へ残れを猶豫致す場合に非ずと密と裏口より間に乗じて
逃れ出で遊行寺を指して落行きました。

第九席

小栗小太郎助重は照天姫の扶けに依り毒酒をも飲まず無事に遊
行寺へと落ちました。が之れは俗縁の叔父であるばかりではない

實に上人は管領へも修信用のある聖故何か哀訴して死骸を引さ
取り葬る体に見せかけ手當を致して蘇生いたさせるやうに願ひ
たいと云ふ事の頼みがあるからでは座います。ソコで夜中ながら
も案内知つたる事では座います。ソコで夜中ながら
委細の事を頼みました。遊行ヨ、承知いたしました。跡は愚僧が
如何様にも取計らつて決して悪くは仕ないから茲を構はずと早
く美濃青墓に在る由井友住の許へ落ちるが宜いと急しき中にも
充分注意を與へられて助重は恐び姿に出掛ち上方をさして登つ
て行く此方は遊行上人に於かせられては早速法衣をお着換へに
なり夜中乍らも管領持氏に目通りを願ひ小栗小太郎追手の爲
め當寺に落延び來つたる處門前に於て落馬いたし其儘相果てた
が素より彼は由ある者の果故直ちに火葬いたし回向をして遺は
したが承れば松倉屋吉兵衛方にて毒酒の爲め身体自由ならぬ處

小栗判官

を捉はれこの身と相成つたる小栗の家来十名... 七十六

小栗判官

に仕へる一ツの... 七十七

入る詮秀は宵の酒宴に前後も知らず寝て居るが余り太刀音の烈
 しい爲め不圖目を覺して見ると大の男が枕元に血縁りの刀を下
 げて立つて居ます 一色扱はッど驚いたが枕刀を取る間に首は
 コロリと前へ落た ○確かに之は仇の詮秀に相違ない……と生
 擒にして置たる下郎に見せて確かめるとツナ
 下郎命ばかりはお助け下さり…… ○命は助けて遣るが之は主
 人詮秀の首か 下郎サ……サ……左様に沙座います嘘はサ上
 ません一同の者は勇み立ち各々一刀ツ、怨みの刃を突貫し其場
 を引き揚げたお咄し換つて松倉屋方へ赴きし二人の勇士は豫て
 案内知つたる事故に裏木戸を捻り切ぎ密かに照天姫の居間へ行
 くど姫は只管夫助重の身の上を案じ眠りも遣らすあつたが今此
 二人の姿を見てハッど驚いた 二人イヤハハ驚は沙尤の次第な
 れど兎に角此家を忍び出さん爲り沙供をサす小栗の家來で沙座

います……サ早く沙準備遊ばせと急ぎ立てられ姫は嬉しいやら
 恐ろしいやら胸に浪立つ思ひにて漸く無事に此家を逃げのびま
 したる愈々車曳きのお咄しより小栗家再興に及ぶの件り今一席
 にて結末と相成ります

第十席

小栗判官が再び出世して立派に家名を再興する事の出来るやう
 になつたのは十勇士の功勳は勿論の事だが照天姫も與かつて大
 に力ある次第でありますナニシロ照天姫も一時は松倉屋吉兵衛
 の處へ身を賣られた程でありますから其困難は一通りでない中
 にも判官助重即自分の夫なる小栗小太郎の痼病やみの如き姿に
 相成つたのを車に乗せて熊野權現に祈誓を懸ける杯といふ事は
 ナカハ並大低な事じやア出来ません……サ小太郎助重は何

小栗判官

して其様病やみのやうな妻になつたかどアしますと愛に美濃
清盛に大なる巨蛇が住んで居た至つて土地を荒しまして百姓
が一方ならぬ難儀を致します之を聞き及んだる小太郎はサア我
慢が出来ない素より一國の領主ともなるべき人物ですから民の
迷惑する事を聞いちやア打捨つて置けない。助重普天の下率士
の強執れか王土にあらざるはなし百姓の爲めに仇をなせば巨蛇
なりとて容赦は出来んと流石は小栗判官でありますソコで用意
に及んで或晩の事松火を照らして巨蛇の棲むといふ處へ遣つて
参ると案の按四斗樽位なのが道の中央へ出懸けて居た。助重ナ
ニシテも中々の大蛇だと思つたから突然口を盛んでツドンと一
發放した處美事當つた……サア巨蛇もナカカ承知しない悉く
暴れ出してアハハ一呑みにされやうといふ處を飛び懸つて左右
の眼玉へ手裡劍を打ち込み向も振り急所へ向けて斬り付けた

小栗判官

から難なく之を退治する事が出来ました百姓一同の喜びは譬ふる
に物なく皆判官小太郎助重をば神の如くに敬まつた去れ惜し
い哉此時に大蛇の毒を受けて悉皆癩病やみのやうになつた處へ
照天姫並びに十勇士の面々が尋ねて参つたが此妻を見て大に驚
いたが急に旗揚げも覺えないといふんで十勇士は一先づ近國の
形勢を見んため思ひに離散し照天姫は多くの人の止るをも
聞かず柔弱き女の身を以つて小車に判官小太郎を載せ已れは之
を曳ひて美濃國より紀州熊野へと参り權現へ祈誓を懸けた其功
驗にや蒲願の日に及んで全く全快致したソコで將軍家へ願ひを
上げ父兵衛尉満重の冤罪を訴へた處義教公にも尤の事に思召さ
れ本領安堵のお墨附を賜つた折から管領持氏の謀叛と云ふ事が
露顯に及びましたゆへ幸ひ助重の爲めには怨みのある事故討手
の大將として兵を向けられた小栗十勇士の面々も本領安堵の事

小栗判官畢

を傳へ聞き曉れも判官小太郎の館へ走せ集り持氏を征伐致す
 いふ事に相成る處が持氏に於ては早くも此事を聞かれ生きて武
 門の恥辱を殘すよりはと終に極樂寺に於て切腹を致しました依
 つて此段室町へ上申に及んだ處將軍家にも殊の外は褒めの御
 業を賜はり小栗家は以前の通り政權を把つて再び花咲く春に
 り逢ふ事が出来ましたが小栗判官が鬼鹿毛の名馬を乗廻す杯の
 事は左して上へき程の講談でも座いませんから茲には改めて
 中上ませんが唯荒馬をも自由に乗ふなしたといふ馬術に懸けて
 は稀代の達人と傳承知下されば充分で御座いますへニ御返願さ
 せ……

自雷也

第一席

エ、自雷也の傳記を伺ひます………全体自雷也は仇討講談といふ
 よりは寧ろ盜賊の張本として言上致ます方が却つて至當かど
 思ひますが、云つて張ち何も仇討に關係がないといふ譯でもな
 い直接には仇を討たなくとも孝子を扶けて親の仇を討したのだ
 から余程義侠心には富んでた者と見なます勿論其善で御座いま
 しやう強盜に道入つても決して奪ひ取つたる財寶を以つて俺れ
 の身へ附けやう杯と云ふ事はしない孰れも貴民の爲めに恤んで
 運るぞいふんだから其精神を汲み分けて見れば又感心な處もあ
 りますナニロ此自雷也といふ者は遠身の術といつて口は既文

目 雷 也

を嗜へ物の側へ立寄れば必ず俺れの姿を隠す事が出来るといふ
不思議な術を知つて居る其上に劍法槍術武藝の道に懸けては
一ツとして暗からざる程の事でありますから盗賊乍らも張本と
して押通されたのであります自俺も斯うして今を民間に下つ
て居るが元は長曾我部家の末流だ何かモ一度元の身分になつ
て名を天下に擧げて見たいがナニモ敵と思ふ肝心の徳川は此
通も先代隠かに治まつて見れば何致し方がない……夫に
来ッこないソウするにやア外に方もしするから切取り強盗は
武士の習ひ……落つれば同じ谷川の水で何仕方がない撰り
ひして居ちやア宜い商法もなからう之りやア手かづに直ぐに盗
賊の仲間入を仕やう……ガガ待てよ同じなるなら木葉泥棒にな
つても仕方がないグント手下の千人も構へて石川五右衛門の向

目 雷 也

ふを張らなくつちやアならないと悪い丁儀を起したものです夫
からと云ふものは全国を廻つて歩いて地の利を見て置いた即ち
能い窟を目付けて夫處へ多くの財寶を集めやうといふ考へ……
丁度黒姫山といふ極く峻な山だが之を見立て住家といえし
た南から攻められたら何處へ逃られるとか西から攻められたら
何處の方角へ向けて逃げれば差支へないといふチャンと間違は
出来て居る全体此山は飛彈から信州へも越後へも往かれる中央
の山ですから極く地の理は克く盗賊の窟などには持つて来ひと
いふ屈竟な地で座いますソコで先づ住家も出来手下も少しは
かり出来ましたが扱能い手下といふものがない自何もなにを
するにも能い家来がなくちやア大きな事は出来ねい自分一人ぢ
やアする事が極つて仕舞うア、誰れか能い相談相手になるもの
を欲しいもんだと心中密かに捜して居るスルト爰に加藤清正の

自 雷 也

家本に柴山要左衛門と云ふ者があるナニシロ豊臣は亡び徳川の
時代になり加藤家も清正のお亡くなりなすつてからは何も思は
しく浪人仕て仕舞つた家改易となつたので要左衛門も兼てふるな
く浪人仕て仕舞つた要ア、之と云ふのも代が代であとさへす
れば此様な事もあるまいが何を云ふにも豊臣家はアノ通りな始
末夫が爲め終に殿様迄も伊家改易實に情ない事になりいつた事
だど頼りに頼息を致して肥後の國を立出で何處を的と云ふでも
あまさせんが追々ど京都へ登り夫から江戸表へ参らうと道を仲
仙道に取り差懸つたのが只今上九處の黒姫山で停座います要
左衛門自雷也に對面の件り次席に上ります

第二席

柴山要左衛門は別に急ぐ旅地でもありませんからブラリ〜

自 雷 也

黒姫山へ差掛つた要ア、未だ日も高しするから此處らで一
一汲やう何れも旅へ出ちやア氣を懸めるナア煙辨だ此が無つち
やア何だか物淋しくつて仕様がねへどアカ〜景色を眺めち
やア煙辨を汲かして居る其内に好い心持になつたと見えてイッ
カ其處へ寝て仕舞つて日の暮れるのも知らずグ〜と高軒で
寝て居ります處へ通り懸つたのが自雷也で座いまして手下の
人数を引き連れて何處か稼ぎに出懸けやうと云ふ道すがらだ
甲オイ〜熊蜂那れを見や悠氣な人間もあるもんだナ日暮れ
たのも知らねへで大蛇の様な野を歩いて寝てやがらア而も大
道の中央じやアねいかア此方どらだから宜い様なるんのだ
でも見付りやア好い餌食にでもされつちまわア乙左様ナ那
でも二本差して居る處を見ちやア侍らしいが不用心千萬な〜
イ〜誰でも宜から一ッ起して見て連れ……チーお頭左様ヒヤ

目 雷 也

ごわせんか 自左様よ那れア眞正の侍なら起す迄もねい事だが
大方酒にでも喰ひ酔つた爲いだらう……とツカ〜と自身に要
左衛門の側へ参つた 自旅人……旅……の……人…… 要ウム
ウーン……エ、人が宜い心持に寝て居りやア誰でい起すア
自ヲ、旅人お目が覺めましたか日も暮れた事だから余り大地へ
臥るのも身体の毒と夫でお起しやたんで汚座る…… 要左様か
夫は辱けないが……と云つて何も大きに汚世話だ地息で身体に
毒であらうが何だらうがお前達の厄介にやアならねい汚接介な
人間もあつたもんじやアねいか全体貴様達アッソソな怪しげな風
で見りやア槍を持つたり刀を差したり侍かと思やア侍でもなし
的切と此りやア盗賊だとして見とやア俺の懐中を知つて夫れで
路金でも取らうといふのかア返答次第で容赦は致さんぞ自
也はカラ〜と笑つた 自お侍様はけるにも程があるせ親切に

目 雷 也

起して遣りやア思を仇の其口上グズ〜吐すと命はねいぞ……
俺を誰だと思ふ日本一の盗賊張本自雷也とは俺の事だ要左衛門
も扱は此頃噂に閉さし自雷也とは此奴であるかナニッロー度
胸を試して遣らうと思ひ 要ウム自雷也の噂は聞いて居るが貴
様が夫じやア其の張本か 自如何にも俺だ…… 要夫りやア何
よりの幸ひ俺りやア見た通りの浪人も徳川將軍へ奉公したもん
だが今じやア改易之と云ふのも怨みは徳川將軍にある事率そ江
戸へ往つて何か覗ひたいとは思ふものゝ實は左様迄にも往まい
と思ふがナント自雷也とやら物は相談だ俺を一ツ窟へ連れて往
つて二三日話え相手になつて呉れめいか自雷也も面白人間に
出逢したもんだと思つたから 自宜しい承知した夫じやア之か
ら仕事先もあるんだが手聞取つて今夜は往けねい今日は一先づ
引揚げて又緩々ど出直そう…… 要左衛門殿とやらアは一様

お出なせいで之より要左衛門は自雷也の山樂へと行く去れば二
君に仕へざる事とて最早世の中に望みもないと云ふ要左衛門だ
から思はず山樂に月日を送る事に相成り終に自雷也の氣象を見
抜いて爰に遁身の術即忍術を彼れに授ける全く自雷也は要左衛
門からして忍術の傳授を得たのである

第三席

爰に又信州村上左衛門良清の家中に勇源太郎正村といふものが
あつたナカ、武術に於ては頗るの名人だけれ惜いかな、職者
の爲めに修前の首尾を損なつて終に村上家を浪人いたし小資の
里へ浪宅を構へ少しばかりの田地を求めて百姓の業をして居つ
た處が或年の事非常な饑饉で何地も米は實のらず畑のもの取
らず百姓は頗る困難いたして居る源太郎も之にはホト、

目 雷 也

したが自分の燃ばかりが買入りの悪いばかりじゃアないから仕
方がない歸らめては居るもの、歸められぬは年貢の差支へで
座います之にはホト、困り切つて仕舞た女房のお春といふの
は頗る貞節の女で克く夫に仕へて女の道を守つて居たが今源太
郎の困難いたす場合を見ては黙つて居られない春、モシ良
夫斯う此年のやうに不作では逆も年貢米を納める事も出来ま
すまいし、浮心配の程もは察せしめます就ては妻しも女房の身他
外に見て居る譯には参りません……依つて物は相談とやらすま
すが如何でしやう妾しも未だ若い身空の事ですから要き川竹の
傾城とやら勤め奉公にでも出ましたら少しは何かの足そくにも
なまじやう何か此事を浮聞下さいましと涙ど共に余儀なき
頼み之とすも素はと云へば亭主の爲め……誰だつて好き好ん
で勤め奉公になん予出たがる者もありませんが全く余儀ない

目 雷 也

也 雷 白

からの事でもあります。運ウツ其方の言ふ處は誠マコトに辱ハじけない事だ如何に儲タカ年トシとは云ひながら年貢ネンキョウ米コメにも差支サシへるといふのは昔ムカシな己ミれの意氣イキ地チのないばかりで飛んだ心配シヤウを懸けるやうなものだけれど之も時トキよ時トキ節フシだ何か目を眠ネつて歸カエりて呉クれ……勤ツメめ奉ホウ公キョウ杯ハの事は決してモ一二度と云ふて呉クれるな同じ苦勞クをするならば夫婦共々苦勞クをする方が少しは樂ラクしみのあるもんだ夫ればかりは決して云つて呉クれるナと源太郎は克クく厭イヤだど云つて中々女房の云ふ事を承知シヤウチしない尤モトも誰タレだつて自分の女房に勤ツメめ奉ホウ公キョウをさして置いて克クい心持ココロの者モノもありすまいが……お春は據タこころなく夫ウツの云ふ儘トコロに一時は夫様ウツサマ了ラシ見ミは出デさないやうにして居イつたが扱ツ納ツめめべき年貢ネンキョウは例レイ令レイ幾キ分ブンかの切り引キリヒをして貰カつて仕舞シマつて又た源太郎腕ウデを拱アいて思案シヤウアンに暮クれて居イりました見る

也 雷 目

に見かねた女房のお春は今度イマドは悉シツく決心ケツシンに及びましたので夫の前マエへ両手リョウテを突ツき奮フ何ナニ持チぞやもや上ウました通り此ココ場バさへ凌シいで仕舞シマつたら又マタ善チカラい折ヒも伊座イザいましてやう何か妾メカしも一時トキの急場キウバを凌シぐのだから勤ツメめに下シさいましたしッーしてお金カネが出来たならば年の明アカくの待マたすに身ミ受けにお出デて下シさいましたしッーと口説クチいては泣ナく誠マコトの愛情アイジヤウ……黙マ然ゼンとして聞クいて居イた勇源太郎源今ゲンイマころ斯カうして落オちふれ果ハて農民ノリノと一緒に居イるが飛トんだ災難アイナンで今イマいやア零落シヤクはして仕舞シマひ女房メカを勤ツメめ奉ホウ公キョウにでも出デさなければならぬやうな譯ワになつたかア、殘念ゼンネンな事コトである……とは云ふものゝ背セに腹ハは換カへられぬ事コトを女房メカの頼タノみを入れて夫ウツとやア據タこゝろない頼タノむとしやうかど鬼オニつおいつ思案シヤウアンいたして居イるが頻シりに女房メカに口説クチかれるもんですから終ハに其ソノ議ギに内ウチし次ツギ手を求モトめて越コ後の新アト潮ウシへど賣ウられて振ヒ田屋イデヤといふ女郎屋ヨウリヤへ身を沈シめる

事に相成りましたければお春には此時既に二歳になる男子の兒
があつて名を友吉と云ひ掌の中の珠かざしの花と慕しんで居る
其友吉を振替ていとしい亭主を置いて遠國へ行くのであるから彌
々となれば女氣の激くより外はありません

第四席

お春はトツ／＼果敢なき遊女に迄も落ちたければツマリは
夫を思ふ一心ですから幸い勤も苦にもせず毎日年期の明くを指
折り敷へて居た源太郎も夫と同じ事で早く夫婦共々暮して居た
い如何に貧困に陥ればとて死んだのなら格別生きて居て遠く隔
たつて居るのは心持が悪いと之れ又お春の身の上を案じて居る
……之は實に夫婦の情愛で伊座いましてやう處が如何も儲年か
らして破なことはない子供が弱かつたり自分病つたりして

自書也

思ふやうに農業も出来ない 源是りやア何も困つたもんだ未だ
血氣の盛りで居ながら斯う弱くなつて仕舞つちやア仕方がない
幸そ田地家作を賣代なし其金を以つて越後の新潟へ立越へ妻に
も逢つて相談の上若し夫れで足りる譯ならば身受けをして何な
りも稼業の道にありつき細いながらも烟りを立てたい殊に友吉
も始終母の事はかりやして居つて那の通り懸しがるもの逢はし
て喜ばして遣りたい……ア、幸そ斯う云ふ事になるのなら最初
から田地や家作を賣り拂い左様して年貢米の不足を足せば能か
つたもの詰らない懸をかいた斗りに益々積る不仕合せア、どん
ど洋世も厭になつて仕舞つた源太郎正村も余り不仕合せア、どん
大に愚に返つたケレも別に仕方が座いませんゆへ田地田畝
をば悉く賣り代なし農らかの金子を手に入れましたからして村
の者にも暇乞をして小費の里を出發いたした處が田舎の者とい

自書也

自 雷 也

ふ者は至つて深切なものでありまして、由彌平と新田の源太郎様もア一してお神さんを遣い處へ遣つてつから勝手も悪いからつて何處か越後とやらへ往くそなたがア、して一緒に居て見ちやア黙つても居られぬい夫に何や彼や能く面倒も見て呉れたから黙つても居られぬい夫に何や彼や能く面倒も見て呉れたが如何なものだらうかね 乙「大に太郎作とんの云ふナア尤ひだア、いやつて村に居て見りやア知らぬい顔も出来ぬい俺が之から一ツ相談のう始めで見ると一寸待つて下さい、ナア事なら村中で少とづも出でて走りたか終に村中一統からして鏡別としていませ何處をせう奔走したか終に村中一統からして鏡別として聊か乍ら源太郎の處へ送られた源太郎も只管辞退いたしましたなれど買はなかつたならば却つて人々の厚意を無にすると思ひ源夫とじやア遠慮なしに頂戴いたします本末ならば立振舞でも

自 雷 也

して「何となくつちやアならないが何を云ふにもお存じの通りの身………」と、源太郎は早くお前さん方へ二人が早く村へ通つて来て一緒に暮すのが何寄りだ………何となくはねいければ、都合どありやア是非もねへつたア、速者では暮しなせいで源有難う御座います左様御深切に仰しやられると何だか別れずすも惜いやうで………と互に何となく惜み惜まれる是が人間のお奥床しい處で御座います源太郎は貰つた鏡別を懐中にし東なくも友吉を背負ひ住慣れし土地を跡にして新潟を指して足いたしましたのが之ぞ源太郎の身に大難の及ぶと云ふ哀れなる講談に移ります

第五席

也 雷 自

友吉を連れて涉取らぬ道を歩み信州より越後へ越さんと彌彦峠へ差懸つたる勇源太郎源ア、モ一此様に雪が降つては仕様がな
ない雪は北國の名物だとは云ふけれども是はやア今に道も明らな
くなつて來そうだ何か大降りのないやうにしたいものだ……
方泣くより此父が泣きたい位だ物悲しげに峠を登つて往く
ナニッロ雪もチラチラ落ちて來た事でありませうへ峠を往く旅
人は一人も通らない其内に段々と雪は烈しくなつて來て如何に
男の足でも歩行に困難では座います丁度山の頂上へ登り切つ
て仕舞つた頭はモ一日はバツタリ暮れて仕舞つたア難義な事
は一通りでないスルと脊中の友吉は又頻りに泣き立つて居る故
源太郎も實に身体谷まつて仕舞ひました源定めし子供も寒か
らうよ如何に肌身へ負つて居てもナニッロ此通を寒いのだから

也 雷 自

……シタガ泊りたいにも家はなし上にはばかり小一日懸つたんだ
から下りといつても今夜一晩位は懸らうア、如何したら能から
うと暫し思案に暮れて居ると麓の方から上つて來たものか弓張
の提灯を照らした浪人風の男が何時の間にやら此方を指して來
る様子源ヤレレ嬉しや旅人が來るからにやア少しやア力に
もなつて呉れるだらうと待つ間程なく提灯を風に消させまいと
スタスタ参りました源ヤ、旅の人……旅エ、吃驚した今時
分に此様と云ふところにポツランど立つて居て全体お前さんはア如
何したんですへ源ハイ拙者は信州在から越後へ越すものです
が此存じの通り雪になやみ恰んぞ難義を致して居りますと云
……と云ふ物腰をチラチラと見て取る浪人体の旅人旅ア、夫り
やア困りでは座いましてやういふ通に俺も此雪じやア困り切
りましたアア斯して連が出來とやア何よりだ一緒に参り

也 雷 自

ましやうとアコッくど裏い服付で眠んだ 護ウム此奴衣装ふ
ぞ汚ぬいが懐中の重みじやア切餅の二ツや三ツは確かなんだ大
方此りやア腹にも居られず越後の親類へでも便つて往く者に違
ひぬい俺も新うして浪人で暮らし居るとは云ふものゝ惡い事に
やア抜目のぬい鹿野門軍八だアイツを一ツ斬いて見て仕事序に
棄めて仕舞はう悪い了儀の奴もあるもんで何と世間咄しを面
白く仕懸け充分油断をさせて置いて後から欺し打に切り懸け
た 運ア卑法なり言葉も掛けずに欺し討に致すとは……と素
より 劍術の腕前は充分に出来て居る源太郎正村でありませうへ
腰なる一刀抜き放つて了儀も切り結ぶナニシロ提灯は既に
消へて仕舞つて雪明りでもつて所合が始まつたんだから中々勝
負は附かないケレども悲しいかな源太郎は心は矢竹にはやると
いへど最初重傷に身体疲勞し殊には背中では一子友吉が頻り

也 雷 自

に泣き立るものですか思はず氣後れが致し雪に這つてバツタ
リ其處へ仆れたが運の盡き軍八は振を被つたる一刀にも真甲へ
切り付け法む所を胸板目懸けて突を入れた急所の深傷にウーン
と源太郎は其儘息は絶へました 軍ウム思つたよりやア脆い
奴……とムクツと笑つた處は實に大膽不敵なる曲者であります
折しも彼方に人の足音が致す軍八は振り返つて見るとコハ如何
に二三十名の人がが執れも雪洞を携へ此方を指して問道らしい
處から雪を踏み立つて来る驚いたのは軍八です 軍南無三……
見付られては一大事彼等は噂に高き盜賊の服本自雷也の一手に
相違ない兼て義賊と聞き及んで居るからには斯な處を見られち
やア命に係はるグズくしては居られぬ處と突然源太郎の懐中
へ手を差入れ財布を取つて一目散に麓の方を指して逃げ出しま
した結果之よと如何相成りますか次第に譲りてや上ます……

自 雷 也

軍入の思つた通果して大勢の者は此處へ遣つて參つた。何だ、何だか可笑いな。勘次其處いらを一寸見て呉れ。○何が可笑んでいさつサと歩行ねいかグズ、待つて來れ大變に血が翻れてお目玉だ。×夫でも……マア、待つて來れ大變に血が翻れて居らア……ヲ、小兒の泣き聲がすらア。○成程手前の云ふ通りコリヤア大變な血だ夫に小兒の泣き聲もするし大方悪い盜賊連が殺人をしたにやア遠いねい……ウム那處の根を見や何だか人らしい者が唸つて居らアと前に立つた二人の者が頻りに咄して立止つたから頭と思しき者は忽ち其處へ參りました。頭何だ、……×へイ此通り血だらけてお負けに松の根木の處に斬られて居るらしいう座ぬす。頭ウムッ……と云ひながら自身

自 雷 也

其處へ往て見ると果して一人の浪人らしき男が背中に小兒を負つた儘切り倒されて居る。頭ハテ不惑な者だ吾れは義賊と名乗つて四海を横行すれと未だに端多泥棒の絶ぬには困る何れ懐中を目撃られての業だらうとツツと側へ寄り克く見ると肩先さへ切り付けられて胸の急所へ突を入れられた中々の重傷で此座いませすケレども未だ片息で頻りに唸つて居る。頭旅人……オ、イ旅の人……と耳へ口を寄せて呼び立てるが齒を喰しはつて少しも受け答へがないソコで懐中より取出したる妙薬は嘗て軍中にて用ひし秘蔵の靈藥……其奴を少しばかり噛み碎ひて旅人の口へ含ませ雪を絞つて口中へ注ぎしが妙薬の印しは忽ち著しくウーンと云つて再び息を吹き返し目をパツナリと開いた。頭旅人……氣を確かに……吾れは天下の義賊自雷也など如何なる事にて斯の災難に出逢しか事と場合に依つては随分仇討も致

自 雷 也

して進せやう 源ハ、ア……と首つたが背中の小兒を指さして
頻りに落涙に及んでる自雷也も心中不感に思つたが氣を折つて
は成らんと思ひ 頭兩刀を帯する身にて少しの苦痛を忍べぬと
は意氣地なき次第氣を確かにして此場の始末をお咄しなさい
源ハ……ハ、イ……と漸く少し勢が付けて参つたか氣を勵したる
源太郎正村 源モ……元は信州の村上の家臣で彦座いするが
仔細あつて浪人し小資の里に少しばかりの田地を求め浪宅を構
へて居たところ引き續く餓饉の爲め年貢米にも差支へ兼ねる
なく女房のお春をば越後の新堀へ勤め奉公……ソ……夫れから
と云ふものは爲る事爲す事手違ひになり男の手一ツで小兒の世
話迄も出ないから嫌なところなく田地家作も賣代なし僅かの路
金を開へて越後なる女房の許へ轉ねて参らうとする道すがら此
岸にて日は暮れ雪は降りしきり難儀を致したる折しも藪の方よ

自 雷 也

り之れも一人の浪人体の男提灯を照らして此處へ來懸り一楹に
時を越そうとすので能い道連と思ひ咄し乍ら參ると突然後ろ
から切付たが不意を喰らつて思はぬ不覺を取りましたと聞るも
虫の息の根にて漸く此處まで咄したのも是非小兒丈は願みたい
と思ふ愛情の心に引かされたからの歸でありませす 頭ハ、ア夫
れは定めし困つたであらうがシタ、其仇の人格相は……
源別に盗賊らしい者でもなく全く一時の出来心で懐中を目覓け
ての悪心かと思はれます……人跡は横腹に古き太刀疵がわつて
左りの目の下に大きな黒子があてますが夫れ丈は健と承知いた
しましたか……と跡は舌もこはりて其儘ガツクリ息は絶へま
した自雷也も始終の様子を聞き是非共小兒を育ても仇を討たし
て遣りたいと云ふ素より義賊でも云はれる者だから義の爲め
には身を忘れても働くといふ心懸けだから今旅人の息の絶へし

を見て背中の小兒をば抱き揚げヨク見ると誠に堪しく肥つ
た可愛氣のある小供で泣すに抱かれて居ました 頭ヲ、可哀想
に、克く大人しく爲て居るノウ……コレ笹熊之を見ろ親は救
されても何にも知らずに抱かれて居るたア小供は罪はねいな
○左様で傍座います……が今晚仕事の事は何いたしましやう
頭ソ、は彼是時刻も移つたから又明日の晩として今日は引き揚
げる事にしやう……ヲ、提灯て云へば燈に灯かゝつて在らア何
だ美濃屋と印しが付いて居らア之も何かの證據になつて少とア
手懸りになるかも知れぬいと手下の者に持たせて死体は其處等
を掘つて之を埋め、頭南無阿彌陀佛……と一遍の回向を
して一同黒姫山の窟へと引き揚がりました追々友吉も成長いたし
て竟に亡父源太郎の仇討を致すといふ佳境に入るの講談でござ
ります……

自雷也も賊こそ致せ素は長會我部の末裔で傍座いますから自ら
義心に富んで居る夫れ故同じ賊を働くにも貧乏人をば助け邪
慳な富貴家どころは容赦なく荒して歩行くデもと、斯ういふ
氣象の者だから非常に子煩悩だと思はれて源太郎正村の一子友吉
を抱いて岩家へ歸つて来たモト何しても二ツの誕生も濟んだ事
故乳がなくとも成長致す 自ド、一モ不思議なものだ男の手一ツ
で育つたものは男の肌へ入れても克くスヤ、と寝るもんだ實
に子供程罪の無いものはねい此奴が大きくなつてからに親の云
ふ事も聞かないで無暗に女郎に熱くなつて遊ばれるのも知らず
にセツセと通つて意見でもすりやア口返答でもするやうになる
かと思ふとお氣が付かれらア……マア何しても宜や斯うして温

第七席

自 雷 也

和しぐして居りやア此方らも幸ひだ……夫りやア宜が未だ
名を知らぬい名の無い事アあるゆいと守衛を開いて見ると信州
村上の浪士勇源太郎正村長子勇友吉とした子供の名前が書てあ
る 自ッ友吉か宜い名だ……何か虫氣もなく成長て一日も早
く父の仇を討たして遣りたいもんだと一人の手下をば友吉の守
り役として附けて置き茲に数年の歳月を送りました然る處友吉
は至つて伶俐なる性質にて一を聞けば十を悟り十を聞けば百を
知るといふ頗る發明な生れで伊座います自雷也も大層喜んで自
分の知つて居ることは手を取つて教へるやうにする殊に劍法は
一刀流の達人故友吉の幼き頃より竹刀を持たして稽古をして遣
りました夫だもんだから自然其道にも詳しくムツツア教へるや
うになつてからはメキくと上達して呉るやうになつた斯様に
ア上ますると何だか自雷也は盜賊を止め善心に翻つて居るかと

自 雷 也

云ふと左様ではない今では益々天下を衝行して自雷也の名を轟
かして出沒自在の大賊なりと役人衆にも大に目を付けられて居る
併し今日には新郷に居るかと思ふと明日は善光寺街道を切り捲く
つて居るといふのだから神の業ぢやアないかと云ふ位はに役人
衆や捕方の方でも薄氣味を悪く思つて居る位である併し始終慮
へは戻つて来て友吉の様子を見るを以て此上なき樂しみと致す
或日の事で伊座います 自友吉よ一寸來な…… 友へエお呼び
遊ばしまして……何か伊座いますか 自イヤ別に用とい
ふ用ぢやアないが今夜は別に仕事にも出さ斯して遊んで居るん
だからお前に少し咄して置きたい事があるんだ 友へエ左様で
伊座いますか早速承りたいもので…… 自他でもないんだがお
前も兼て知つての通り俺は天下の盜賊で富家を奪つて貧者に恵
むといふ聊か義の爲めに盡すのだ今迄お前も俺をば父と思つて

也 雷 自

仕へて来たが實は父でもなんでもない言はれ赤の他人だケレ
も之には大に曰くのある事………と之から彌彦時で源太郎が浪
人の爲めに殺せられたる事より折よく己れ等手下の者と通り
合して扶け上げた事の一任一任を詳しく物語り自夫様いふ譯
だから俺も是非源太郎殿の仇討をさして遣りたいと夫ればか
り願つて居るんだお前も何が其氣になつて劍道武術を磨き首尾
克く本懐を達する様に心懸けなくつてはならないッシーッ
も俺の出來る丈は指南致して遣はすから決して怠りなく稽古す
るが宜い用といふのは之れ丈の咄しをして置きたいからの譯で
あると事明細に友吉の素性を話して聞せたから聞く度に驚る
く友吉友扱は左様いふ次第で座いましたか知らぬ事とは云
ひ乍ら今日まで其の父の思つて居りましたか知らぬ事とは云
にも優る大恩を受けた貴郎様………

也 雷 自

及び年恰好は涉りて座いましてやうか 自ア、之れ………急い
ては事を仕損じる必き急ぐやうな事では敵は討てない………大概
は俺も承知はして居るが未だ判然とした事は云はれない何れ敵
の知れ次第召し連れて討たして遣らうから………夫に就いても腕
が充分に出来て居なかつたなら扱其時に役に立たん劍道を心懸
くる事肝要であるよ自雷也に深く戒しめられ友吉も有難涙に暮
れて一間の内へ退きましたか愛に自雷也は圖らざる災難より仇
の有家を探り出し友吉をして亡父の仇を遂げしむるの一席

第 八 席

自雷也は此頃少許黒姫山の窟にばかり引籠つて居まして余り出
懸るといふ事はありませんが手下の者は絶へず旅商人などの風
に出扮つて諸國を遍歴し豪家へ目を付けて置き自雷也の許へ一

自 雷 也

々此事を告げるやうになつて居る夫れが爲めに居ながらにして
諸國の様子を知り出来る、スルと或日の事、手下の機次と云ふ
のが丁度旅から返つて参り四方山の咄しを仕て後越後新發田の
豪家でもつて渡邊與右衛門といふ名代の米穀同屋があるが先づ
那處なら態々出向いて往つても充分の實入がありまじやうから
一ッお頭のお出を願いたいもんですすが如何でしやうか 自夫り
や○持の穴だと思つて見やア出懸けても往ければ機次的は確かだら
うな 手下「エエ、夫とやア決して俺の目が外れッこは伊座
やせんや一度腕んだら乾度五箱や六箱の物は持つて来られるだ
らうと思へやす 自左様か夫とやア皆なも支度して鬼も角も往
つて様子を見る事に仕様と目立たぬ様に何れも用意に及んで来
て見ると成程ナカ、休した掛へだ、
兄哥の云つた通り五箱や六箱はお茶の子サイ、
○左様よ

自 雷 也

お互へに此節ア實入りが薄いから何か来た駄賃に少たア余徳で
もあつて呉れどやア宜が、何も左様懸張るねい出来せいすり
やアお頭の方からだつて割り返しが来らアナ、
様だけれを成らう事なら何か甘く遣りていもんだと互ひに密々
咄しを致して居る兼てより黒姫山の山藁に客分として足を止め
たる柴山要左衛門は斯ういふ時の役には立つて貰うと思ふから
自雷也も相談相手として召し連れて来た鑓で要左衛門は忍術の
法を以て密かに渡邊與右衛門の邸に忍び入り間毎々々を改めて
見たところ別に用心の殿しい家でもないらしいソコで其赴を自
雷也に咄しますと 自然らばと云ふんで三十二人の手下の人数
ドヤ、ッと押入つて下女下男を繰り上げ一人を残して主人の
居間へ案内する主人も城をみるありませんから金庫へ自雷也を
連れて参ると一ッの大きな穴庫が掘つてある中は眞暗で定かに

自 雷 也

分りませんが確かに金庫に相違ない自雷也は亭主を先に立て、
穴庫へ下りれば宜うかたものを通油断を致して自分先へ立
つた亭主「……」と一突突然自雷也の後から穴庫の中へと
突落した武術の心得ある自雷也なれど隙を窺はれたから逆も避
る暇がなく穴庫の中へメデンドーと逆とんぼを打つて落ち入り
ました之は實は金庫ではない兼てより盗賊の入つた時は此處
へ逃れて来て此中へ突き落さうといふ計略を考へてあつた陥穴
で伊座います其中に家内の者がデキ近所の寺へ往つて早鐘を突
たから堪らない泥棒の方でも自雷也の事も氣懸りにはなるが
ッして居ては自分達の身の一大事と遂に渡邊の邸をば命か
ら逃げて出したが自雷也は運命を以て爰に縛りの身となり新
發田の城主山田伯耆守の調所へ廻され入牢の身と相成りました

第九席

自 雷 也

お咄しは跡へもどりますが彼の源太郎の女房お春は越後新潟の
妓樓へ身を沈めましたけれど夫源太郎の許より風の便りもあり
ませんから大きに心配して急々飛脚を立て、信州小笠の里へ手
紙を持たして遣つて見た處が三年跡に村の衆に別れを告げて越
後へ参つたと云ふ事は聞いたもんですから猶々心配で仕様がな
い夫からと云ふものは仇に月日を送つて居る内に新發田の城主
山田伯耆守がお忍びに此新潟へお出になつた節一夜の湯愉快
を遊ばして其晩お寢間の處を拂つたのが此お春即ち源氏名を紅
梅と申して居りましたが痒い處へ手の届くと云ふコツテりとし
た扱ひが大層得意に叶つて終に根引されて新發田へ連れてお歸
りになり側女とまで出世いたした

氏なくして乗る玉の輿

とやしますすが女位は盛衰の著るしい物はない昨日まで溝板をガ

自 雷 也

ククサ鳴らして横丁の豆腐屋へ味噌を下げて買いに往つた女
も玉さへよければ何子等の令夫人とまで敬められないといふ事
もない……言はれたいの宜い化物だ……お春も今は太守の側女と
なり浮遊愛を樂つては居るものゝ夫源太郎や悴の友吉の事は毎
た間も忘れる時は夢にませんと然るに此頃不思議な事には毎
のやうに唸つて妙な夢を見る夫源太郎が背に子を負つた儘血
汐に染つてボーンヤリと枕元へ立つて怨めしうに彌彦に於
て殺害された事から友吉は黒姫山に住家を構へて居る天下の義
賊自雷也の手下に養はれ劍法の達人となつた事から其仇と云ふ
のは當時松倉典膳と偽名して伯耆守が浮抱へになつたる劍客が
即ち俺の仇だ夫に自雷也は此間中から召取りになつて牢内に繋
がれて在るから是非救つて遣りたぬが夫に就ちやア敵松倉典膳
が新發田の藩中に居るといふ事も知らして遣りたいから克く

自 雷 也

取調べて呉れるが宜いと云ふかと思ふと夢は覺めました此な捕
梅に毎晩く續けて見ますからアお春の心配は一通りで無い
春屹度之りやア夫源太郎殿は何人かの手に懸つて殺害されたに
相違ないが其自雷也とやら云ふ盗賊は全く半に繋がつて居るの
か知らん夫に松倉典膳といふ劍術の先生も全く殿様がお構へに
なつたのかしらんとは是から内々詮索をして見ると夫に相違ない
スルと又或晩の事源太郎の亡魂枕邊へ立つて「自雷也の事も松
倉典膳の事も相分つたなら源太郎の仇は當時新發田の太守に新
規召抱へになつた松倉典膳に相違ないといふ事を一筆書いて枕
元へ置いて呉れる俺が明日晩来て其手紙を自雷也に渡すから……
決して疑うべき事ではない呉々も頼んだと云ふかど云へば夢が
醒めました春物は試しだ一ツ夢の知らせ通りにして置て見や
うと巨細の事を認めて枕邊へ置きましたら案の掟明日晩になる

也 雷 自

第十席

と再び亡魂があらはれて其手紙を持って往つて仕舞つた素よりお
 春も其姿を見た譯ではない唯夢ともなく幻ともなく来ては怨め
 し氣に咄すので姿を認められた譯でもありませんが果せる哉源太郎
 の亡魂が手引して友吉の爲めに首尾克く本望を遂げさすの請
 談自雷也の義俵なる助太刀と共に今一席にて結局と相成ります

人の二心程恐ろしいものは伊座いませんぞ源太郎は彌彦時
 て殺害されましたのが能くく残念であつたと見なして成佛が仕
 切れない魂は此土に止まつて是非共伴友吉に仇討をさせたい
 といふ存念……自雷也は圖らずも家渡邊與右衛門の處にて終
 り石捕に相成新發田の半内へ繋がれて居つたが或夜の事夢と
 も現ともなく源太郎正村の亡霊が願はれて彌彦時の仇は此書面

也 雷 自

の中は詳しく書いてあるといふかと思ふと夢が醒めた自ハテ
 不思議な事だ夢は五臓の煩らひといふから夫れが爲でもあらう
 かど不圖前を見ますると一通の書面があるハテ心得ぬ事かなど
 思つて中を披ひて見ると仇と云ふは新發田の太守に新規お召抱
 へに相成つたる處の松倉典膳と云ふ者だと云ふ事が解つた自
 ヨシ之りやア全く夫れに違ひはなからうから斯して居ては
 逆も友吉に仇を討たせる事は出来ないう事と破半を企てる方が
 方の爲だ……ナニ之しきの田舎半何の他愛があるのかと素よ
 り忍術を心得て居るから直に用意に及んで礎石を外し何地とも
 なく逃げ去つた此方は黒姫山に残つて武藝に余念なき友吉は或
 夜の夢に父源太郎の仇を討つ時節到來したといふ事を夢枕の告
 があつた故心中大に勇み立ち一日も早く仇討をして亡父が修羅
 の亡魂を晴したいものど心待ちに待つて居る處へ自雷也が圖ら

自 雷 也

すも立歸る... 〇克い處へ歸つて下... 夫には兼ての忍術を以て誘出す手術は幾らもあると今度は多く... 常旅人を殺害したる一子友吉の爲め義に依つて助太刀を致す尋

自 雷 也

左右から詰寄つた典膳も胸にギツクリしたがソコは劍術の指絶... 吉は首尾克く本望を遂げたが此事一藩の評判となり殿の側女お

自 雷 也 畢

毛谷村六助

第一席

エ、此度は好みに依つて毛谷村六助の傳記を言上いたします此
人は大層親孝行でもつて其上武藝に懸けては至つて鍛錬である
尤も不思議な事には彦山權現の靈顯を蒙り自然と身に太刀筋を
受け大方の備はつたと云ふ事であります夫は追々に辨じます
として爰に越州毛利家に仕へて劍法の指南を致す吉岡一味齋と
いふ者がある性質至つて正直で誰く人と交はり假にも他人の非
を擧げて争ひなむを致さない夫れ故門弟等も其徳を慕つて道場
も誠に榮む中國筋に於て八重垣流といつたなら誰れ知らぬ者な
き程であつた處が取る年の事で六十二歳にも相成つたといふの

毛谷村六助

毛谷村六助

で隠居の願ひを擧げ惣領の源之助といふのに家督を譲り遊樂の
指南をも托して置いたが父に劣らぬ劍術の遣ひ人故以前に變ら
ず繁昌を致して居ます一味齋先づ此分ならば俺も隠居して
之からは好な茶道でもやつて世を安樂に送る事が出来やうと只
管歡んで居た然る處源之助は如何いふものか生來多病にして父
一味齋とは大差ひ丁度花さく彌生の頃であつた同役の方と連れ
立つて櫻狩と洒落こみました各一瓢を腰にして城下から一里斗
り隔つたる處の八幡の里……此處には大層櫻が植つて今を盛
と咲き揃つて居る……夫處へ足を向けて一日の愉快を盡した
竹内氏何も花は櫻木人は武士實に爛熳たる櫻の花を見ては武
士の魂も見へるテナア……
○左様く塵もかすらぬ匂ひ清ら
かな花を見ては徐ろに武士の面目も忍ばるゝといふものさダガ
夫は夫れ此れは此れとして斯う難查の中を見ると幾ら平生の誠

助六村谷毛

延しかは知らぬが那の道化けた真似も参り感心いたさんて
×「ダガ之は町人共の此上なき樂しみマア」大目に見て遣るべ
しだ ○「アハハ、何も答めだてを致す譯ではないが手前の
お咄しを聞いて終い咄しに實が入つた之では折角の花見も興が
ないサア何處かで快よく一盞汲もうではないか……ケレをも就
れも那の通りの贅茶屋ばかりダガ……之も風流の一ツだらうノ
ウ吉岡氏お手前は大層先刻から酔ぎ込んで居るやうだが何か致
したのか樽を嗜すは酒に限る然らばアノ二軒目の茶屋がよから
う別嬪の如きんも居るやうだしするから……」と幾分かモ一歩
酒が廻つて居るからして爰に三人連れ立つてトある贅茶屋へ道
入互に差し押へつ盃を取換して居た斯くて其日も暮れ近く相
成り今迄人山を築いたかと疑はるゝ程の櫻の下もイツカ寂寥と
して仕舞つたので初めて氣が注いた ×「サイ竹内……吉岡……」

助六村谷毛

モ一之れ日も暮れ懸つてイツカタ景に及んだ余り永居をしちや
ア此茶屋でも迷惑するだらうサア歸る可し……吉岡「夫が宜し
う座らう……」之れサ竹内……お手前はモ一酒を飲むと跡曳さ
でお神輿が据つて仕舞うには困るノウ……サア中村はモ一門口
に立つて待つて居る……ナニ勘定が済んだかつて……勘定は残
らず済んだのだ其様もとは心配せずと云ひ立ち玉へ……マ
タ「お丁子などを振つて見たりしてモ一お積りだよサア立た
んかへ 竹内「マア」左様堰き玉ふな……姐さん熱いんで一升
お代り……吉岡「之は冗談ヒヤアない宜い加減にせんか……」姐
さんやモ一お眺へは止めてお呉れよ 女「へい」……とニコ
笑つて居る吉岡は漸々の事で竹内の手を取つて外へ連れ出し之
より三人して各々家路を指して歸つたが源之助は其晩からして
不圖發熱いたして夫より病の床に就きました

始めの内は左した事ども思ひません風邪位だらうと買薬なとで
 夫れ何事も病氣も永びくといけないう薬の服も飲で治やア何よ
 診察て貰つたら何なるんだのう診察てお貰ひ……源左様で
 重疊であるから今日は日もよし診察てお貰ひ……
 座いませす左したる事ども思ひませんが夫とやア診察て貰う事に
 教しませしやうと之から道安といふ殿様の診察を受けたるが
 カ……醫道には堪能の人の……此人の診察を受けたるが
 醫之は昨日今日何れも發病した譯じやアないモ三年も跡から病
 氣は起つて居たので余程多大事になさいませんと往けませんと
 云ふ手重な見立で座いませす……

ら種々ど手を盡して看護するが如何にも遠安の見立通り一寸に
 全快する筈といふ見込がないらしい夫からはモ一床に就いた限
 りたが終に其年の暮に至つて歸らぬ旅路へ赴きました而親の嘆
 きは大方ならず分ても一味齋は男子と云つては源之助一人跡は
 お園にお菊といふ二人の娘がある斗り夫れ故大層落膽いたし共
 に消へも入りたき思ひでありますが老少不定は世の習ひで實に
 據ところない譯だソコデ七々日の供養も濟みましたが娘二人に
 八重垣流の劍法は教へて置たから遣人にはなつて居つても女子
 で道場の指南役には出ない一味齋も差當り之に當感しまし
 たソコで據ころなく高弟衣笠彌右衛門に師範代を勤めさせられ
 は再び昔に返つて彌右衛門に力を加へ稽古に余念もなき故以前
 に増して道場は盛りましたお咄し變つて爰に又其頃浪人のも
 當時藝州へ渡り道場荒しといふ評判を取つた徹塵流の達人京極

助六村谷毛

内匠といふものがある此奴ナカの横着もの心邪なものであ
るゆへ誰も相手にするものがないと或日八幡宮の放生會が
あつて大層な賑ひで伊座います吉岡の娘二人は下女を一人連れ
て此賑ひを見物かてら保養がてら出懸けました姉妹とも揃つた
美人で天女の天降つたかと思ふばかりの装ひ……此二人の美し
き姿を不圖目に留つたのが京極内匠で伊座います内匠ア、世
の中には随分美人も多いけれど八相備つたと云ふのはア、二人
の女だらう何地の誰の娘だか俺も斯して獨身で暮して居るのも
何かア、云ふ女を女房にしたいからだ……と恍惚として見惚て
居る内匠ガ那れは何處の娘だらう切めては名前でも承知し
て置きたいと其日は附つ廻はしつして居る娘二人は其様事は知
りません園お菊やモ一大概見て仕舞つたし夫に余り遅くかへ
ると又母親が伊心配なさるといけなからモ一歸ると致しまし

助六村谷毛

やう菊夫が宜しう伊座いましやう……お鍋やモ一歸らう姉さ
んも伊歸りになると仰しやるから……と此處で姉妹は連れ立つ
て我家へ歸りました内匠は心空蟬の何處へ歸る事やらと密と跡
を追跡して往と吉岡の道場へと道入つた内匠扱は兼て噂に聞き
及んだ一味齋の娘か……之りやア少し手剛い奴に懸つたわいア
、云ふ頑固な爺だから此方から縁談を寸込んでも必定勿ね付け
るにやア違ひない腕拱いて考へて居たが道場の門前へ突立て
此様事をして居てモ門弟にでも見つかりやア宜いお笑ひ紳だ
と心附きましたから盆槍して其日は宿へ歸り突然布團を被つて
寝て仕舞つた内匠ア、思ふまいと逆も吉岡の娘とやア及ば
ぬ懸だ……及ばぬ鯉の淵登り磯の鮑の片思ひつて昔しから此様
色の出来た試しなしたア、詰らぬい止さうと眠らうとする
と生憎姉妹の姿が眼前へチラ付いて宛然二人が其處に居るやう

だ内匠も懸といふ者に逢つちやア仕方がない内匠エ、儘よ嘗
つて碎けるといふ事があらア夫れぢやア何か宜い手藝を求めて
兎に角二人の内匠地か貰ひたいと申込もう橋渡し次第で正逆に
否とも云へまいから」と充分思案を固めて媒介の人を見付けて居
りました

第三席

爰に一味齋の門弟の内匠で古くから弟子入を致しました春木藤藏
といふものがあつた顔の古い割には劍術は余り出来ないと云つて
皆無でもない所謂コロガキ劍術でへたなりに固まつたので座
いすす其春木藤藏といふ者と圖らずも或る料理屋に於て懸意に
なつたのが例の京極内匠だ素と内匠には腹に巧みがあるん
だから頼りに此藤藏には世辞を仕ひ或る時は自腹を切つて呑つ

て遣つた事などもあつた……モ一彼是宜い時分だと思つたから折
を見て藤藏に己れの心を打明せ是非共二人の内匠一人を懸望した
いと云ふ事を咄しを致し内匠夫に就ては外に橋渡しを頼む者
もなく幸ひ貴殿とは斯して別懸にもなつた間柄だから何か何
分一ツ迄配慮を願ひたいと猫撫で頼み込んだ藤藏は余
りは利口の方でないものだから跡先の分別もなく藤藏は余
座に喜びお安いの用と云はぬ斗りの口上で委細承知した内匠も
大に喜び内匠然らば何分共にお願いひやすと其日は夫れで別れ
て仕舞つたが藤藏は幾ら馬鹿でも切退いて考へて見りやア何
師匠一味齋に向つて言ひ出す折がない一日二日と其日遁れにし
て居ると内匠からはヤイといふ催促だ大抵なものなら其處
で断はつて仕舞うんだが根が甘い方ですから断るといふ事も出
来まアマリ板挟みとなつてウンといふ方と陰つて居る藤藏仕方がな

い俺も受合たのが災難だ思ひ切つて師匠に跪して見やう何と云ふか知れぬいが……とソコで折を見て徹塵流の達人京極内匠から姉妹の内一人を懇望するといふ事を見抜た處が一味齋は兼てよと京極内匠の腹黒だといふ事は見抜たから宜らうといふ事ははつた藤藏も断はられて見ると夫でも道つたら宜らうといふ事は言へないト云つて内匠には何の彼のど義理がわかるら師匠はお断りだトスゲなくも云へないソコで馬鹿は馬鹿なりの謀を案じ出してツマリ流名が合はないから他流ではお断りだ殊に徹塵流など云ふのは山かんの偽り流だといふ事をお負けを附けて断つた此事を聞き及んだる京極内匠内匠何も呉れぬいのでい、流名に疵を附けて断るなどとは不法千萬の申條呉れ一味齋唯では濟さんぞと懇の叶はぬ自棄糞だから堪らない俺れ一味齋の様子を伺つて居る一味齋は其様事とは存じませぬ怒り心頭に發して一來齋を覗ふといふ藤藏の一言より大なる珍

事出来に及ぶといふの件り次席に譲つて辨じます

第四席

春木藤藏も綴談の事を師匠に咄してからといふものは自然と陳まれるやうになりましてイト、評判の克くない上に益々首尾を傷ねましたから自分もモ一糞自棄になつて仕舞つた藤マ、よ斯うなりやア仕方ない事そ内匠に加擔して怨みを晴して遣らうと罰當りな人間もあつたもので今度は甘く内匠を甘許こんで返つて師匠一味齋の讒訴をし内匠の手を以て怨みを返そうといふ手段を行つた……ナカ、斯うなつて見ると藤藏も馬鹿でな……内匠は藤藏の一言を聞いて無念彌々胸中に溢れ内匠斯うなるからにやア必度遺恨を晴らして呉りやうと密に嫉刃を研いで一味齋の様子を伺つて居る一味齋は其様事とは存じません

助六村谷毛

風邪の心地と二三日道場も息み引籠つて居る此事を聞及んだる
京極内匠何と思つたか知らんが毎夜のやうに吉岡の邸へ忍び入
り様子を知つて居るスルと一味齋は老人の事故誠に小用が近
い……今しも小用を足して便所を出で雨戸を開けて手洗鉢の水
をすくひ手を洗うとすると突然白刃を下から突き上げた手燭を
その傍に置いてあつたが四邊は全く真の闇故一味齋如何に武
術に鍛錬して置いたかの礫は避け難じてトツ胸先へ突を入れら
れたアツと驚いたがソコは心得のある事故突然手燭を消して仕
舞ひ兼て準備の脇差を引抜きヒタリと構へ一味齋「ヤア」何
奴なれば卑怯にも欺し討に致す内匠何を小癪な怨み重なる一
味齋縁談の義は兎も角も克くも我が流名をそしつたなサア微塵
流の腕前を見ろと聞かす刃を迫り込んできたガツと受流し
たる一味齋も最初の重傷は急所に懸つて居る事故今は先方を討

助六村谷毛

どうと云ふ勇氣はない唯受太刀にはかりなつて居る一味齋扱
は俺れ京極内匠イツソヤの縁談が叶はざるを遺恨に思ひ欺討に
致したのじやなど心は矢竹にはやれども次第々々に太刀先が狂
ひ再び内匠の爲めに肩先さ深く切と込まれて思はせ其處へバツ
タリ作られた此物音を聞き付けて門弟衆並びに家内の者も何事な
らんと手燭を灯し追取り刀で参る内匠は留めよを刺さないが認めら
れては一大事と刀の血をぬぐひも敢へず塙を乗り越え闇夜を幸ひ
何處にもなく跡を晦ました引き返して家内の者并に門弟衆も此塙
へ来て見ますと驚いた○「ヤア先生が……」×「エー何先生が
如何遊ばした……」ど一同の者吃驚仰天抱き起して介抱すれば此
頃來病氣の處ろへ急所の太刀疵を受けたるから夫れが爲めにハ
ヤ「息も絶へだへになつて居る一同先生氣を確かに疵は淺
傷なり氣を確かにお持ち遊ばせ一味齋「エー残念なり……」とク

ワツと目を見開き血走る眼中に四邊を睨み敵は何れにか逃げ失
せたかエー無念だぞ……一回、テ、敵は何者なるかお心當
りは傍座いまするか一味齋敵といふは劍法の達人徹流の京
極内匠イッゾヤ娘の縁談叶はざるを遺恨に思ひ終に不意を討つ
て立退きしならん……俺はモ一此傷手にては逆も存命覺束なし
別に心残りもなけれと唯案じられるは二人の娘……と云ひさ
してガツクリ其處へ仆れて仕舞つた女房并に二人の娘は右と左
りに取廻り女房我が夫一味齋殿……娘父上ノウ……と聲を
限りに嘆きましたが生者必滅會者定離……死したる者は再び歸
らず一同の者も漸く慰めて早速檢使を受けたが別にお咎めもな
くして野邊の送りも済みました四十九日も経過ますると一味齋
の妻お松は道場を取り締りをして居る衣笠彌右衛門と云ふのを呼
び寄せ已れ等母子三人は夫の敵親の敵なれば是より當地を脱足

して仇京極内匠の有家を尋ね運を天に任せて勝負を致さんとい
ふ事を物語り就ては之れ迄永年の間吉岡家の爲めに盡されたか
ら不足ではあらうが跡の處は引き受て道場を盛んにやつて貰ひ
たいと決心面に願はれて之の儀を申しました彌右衛門は此れを
承り彌其志は辱なくいへ共私しも先生の引立を以つて何
やら劍法の奥儀をも許され八重垣流の免許を受けましたは之皆
師匠の高恩貴女方が仰せられる迄もなく私しよりして四十九日
も果たなら仇討の願書と上げ出發致さん心得では座いますか就
ては傍三人様にも其思召ならば何卒私にもお供を仰せ付られ
傍後見ともなつて及ばせ乍ら敵内匠に一太刀なりども恨を返し
たく此儀は是非許しを願ひたう存じます松夫りやア尤の次
第だが夫れでは誠に困る折角亡き夫の之れ迄取り立てた弟子達
も貴郎に此處を抜けられては之れ迄の苦心も水の泡何を致すも

毛谷村六助

手向の種仇討の事は三人の者に托してモ返り討にでも逢つた
なら其時こそ道場を疊んでも再び發足して貰ひたい決して夫れ
にて遅い譯ではないからと何と彌左衛門が頼んでも聞入れませ
ん據どころありませんゆへ彌夫じやア仰に從ひ暫らく道場は
お預りや上げ目出度くお歸りを待ちや上まじやう無何か何
分頼みます……と之より別れの盃をいたし母子三人は越州を立
出し内匠の行術を尋ねる仇討發足の講談愈々毛谷村六助の本傳
に移ります……

第五席

爰に又九州豊前國小倉に近き毛谷村といふ處に孝行六助といふ
農民がありますがナニシロ孝行六助とも言はれる程の者であり
まするゆへ親孝行なる事は云ふ迄もない六助は父に先だたれ一

毛谷村六助

人の母に仕へて孝行を盡す六助は生れついで正直もので至つ
て温順なるものであるが如何せん家貧しく充分に母を養ふ事が
出来ません夫れ故人の田畠を借りては之を耕し又は山中に入つ
て薪を折りなせして之を市に賣る其儲けを以て母親を養つて居
る實に若いに似合せぬ心懸けてある處が六助は頼りに武藝を好
み劍術にあれば槍術にあれば一方に抽んでたる者があると聞けば道
の遠きをも厭はず往つて武術の咄しを聞く又相撲は極めて巧み
なるもので村の柳相撲杯でも六助の片腕にも足りる者もないナニ
シロ身の丈け六尺三寸といふのですから頗る大兵なるものであ
る六助は常に心中に思ふやう六助今天下は麻の如く土民とい
へども其器量次第で一國一城の主ともなり天晴出世する者は幾
らもある俺も何卒よき主人を求めて之に仕へ家を起し身を立つ
て何か功名手柄を願はしたいものだ夫に就ても一人の家には

助六村谷毛

系圖があるもの詳しくなくとも俺れの系圖でも聞いて置きたい
と或時母の機嫌を見て之を尋ねました處が母は憐かな處は知ら
ないといふされたゆへ少しく落膽したけれど之より心中に大願を
起し同國田川郡彦山は靈顯あらたかなる神なれば彼の社に參詣
し一ツには先祖の系圖を知り二ツには我農業の暇なき身体ゆへ
四方を廻廻つて名譽の劍術者を訪ね武術を修する事も出来な
い師匠の手を借りず神の力を以て自然と武術の感得するやうに
神の加護を頼むは如何なるのだらうと之から彦山に登り彼の
玉谷の靈泉にて身を清め心の垢を潔ぎ直ちに三岳の廣前に額を
現在の人に物を訴へるが如く志願の赴きを神明に告げ奉り
六助南然妙智力の權現様我が志願を受納まし給へ南無妙智
力の權現様と頻りに祈願を籠め大願成就の期間は嬌欲の道を絶
たん事を誓つて下山を致した是からは毎日のやうの水を浴び産

助六村谷毛

山の方を遙拜し一月の内に三度か五度暇を見て登山を致し勤行
日々に怠りなく油断といふものは座いません六助は斯くの如
く神には信心を籠め母には孝行を盡して居ましたが天正十一年
秋の初めの頃より老母は何となく風の心地と病の床に臥し左し
たる程ではありませんがブラ〜致して居る夫れ故少しの間も
側を離れず晝夜薬の世話から何や彼や心を慰めサマ〜にいた
はりて看病して居るといふが定命にや終に世の中頼みなく果敢
なくも黄泉の客と相成りましたア孝行なる六助の事であるか
らして其歎きも大方ならず母の死骸に取纏つてさながら生きた
る人にも物言ふかの如く悲歎の涙に暮れたるが斯てあるべき
事ならねば菩提寺の住僧に頼み野邊送りも濟ませたが夜になつ
て世間もシーンと静まつて來ると六助ア、定めし今頃は母も
寂しく有るだらうと母の墓所へ至り香を焚き生たる人に仕ふる

助六村谷毛

も眠らずに居たが忽ち曉き近き頃に相成ると頻りに眠氣を催し
て我慢が仕切れない思はず神楯に依りかゝつて眠るともなくま
どろむともなく致すと雖ての事神殿の扉が自ら開いて衣冠正し
き神人侍手には弓箭を携へ腰には神劍を帯し忽ち然として出で給
ふかと思へば後の方には侍供の神達或ひは束帯にて弓箭を帯し
たるもあり又は甲冑に身を堅めたるもありゾロ／＼と出て參つ
て數も知れない此時眞先に立つた神人階上にたつて屹つと見
し賜へば自ら六助の身体にも光りを添ゆるが如き心地いたし
り土地へ飛び下り平伏に及ぶと神人の側に侍きたる一人の老翁
神人の仰を承り徐ろに階を下りて平伏したる六助の前へ來た
翁善哉々々汝實に孝心至誠の君子なま是に依つて其志を感はさ
せ賜ひ既に先きに家系の巻物を顯はし授け玉ひぬ汝が曾祖父に

助六村谷毛

至るまでは代々筑後の國高良の神職なりしかと天下の乱によつ
て神領を奪はれ零落して當國に移住し汝が祖父を生めり其後愈
々家貧しく汝が父の時に至り彼の系圖并びに短刀など先祖の寶
を人に奪はれん事を恐れ家の棟に隠し置たり次に汝が爲めに武術の
妙を授け給ひ又力量をも與へ給はる可し先づ汝が兩肘を出す可
しと肩を脱させ兩肘の上を幾度か撫給ふに榮るの内が言ふに言
はれぬ温みがある且ツ自ら精神快活に相成り骨でも肉でも生き
換はる様な心持が致した此時件の翁は聲高らかに翁善哉々々
々之にて力量并びに武術を授け終れり然れども茲に一言汝に告
ぐる事あり汝仕官の道を好むと雖若し輕々しくする時は却つて
後悔のあらん但し天下を遍歴して身を賣る事勿れ自然と起る可
き時を待つて起れ今又神力を賜はる上は汝を組留る程の者世に

あるべしども覺ゆる然れども後に汝が力量に勝れて組どめる程
の出入来る可し必ず其人に従ひ身を立よ去れども其身の終りを
克くする事能はし是れ天數なり功名は未代に残る可しユメ
不忠の志さしを起す勿れ云ふ可き事は之のみ必ず疑ふ
勿れど宜まひて神人始め之に従ふ神々も再び素の扉の中に入り
賜ふかと思へば夢が醒めました六助は奇異の思ひをなし六助
れふそ正しく神のお告げに違ひない……と再び合掌して神殿を
伏し拜めば夜もツラツラと明け渡りましたッコで六助は下山を
致したのがア之からといふものはイトツカのある上へ又力を授
かつたのですから實に大力無双なる事夥多しく相成つた去れど
も六助は少しも人を侮るやうな事はなく其上力量にも願はず暇
さへあれば山に入り薪を折つて小倉の城下へ賣りに出懸けます
が或日途中に於て夫が爲り一つの騷動を引き起し却つて出世の

糸口を開く講談

第七席

ナニッロ六助は力量の勝れて居ります事故に薪を賣り柴を賣る
に行くど云つても人の十人振も持つて行く夫れ故六助が擔いで
来るどマルデ小山が動き出したやうな有様見る人驚かぬ者はな
い、デ例の如く六助は柴を荷いて小倉の城下に至らんとする途中
當時小倉の城主立花左近將監殿の家來にて青木武助井村六左衛
門小野源八と云ふ跳れも藩中に聞ゆる武術の達人で座いま
すが幸ひ天氣は宜しからと云ふんで遠乗りと出懸けたが其
三人の騎馬に出逢つたのは彼の六助であります流石の馬も驚い
たのは小山のやうに擔いで來た柴を見たら……ヒーンと一
聲嘶なくかと思ふと棒立になつて暴れ出した青木武助は夫れが

毛谷村六助

が足りぬいからだ人間の命の貴いのはお武家さんでも百姓でも
夫に變りはありやせんとヤツと懸けたる矢聲と共に五六間先へ
投り出された之を見たる残りの武士 兩人「ヤア駄つて居れば無
禮千萬……」覺悟致せ……と拔連れて双方より切り懸けた六助
少しも驚かず無手にて兩人を相手となし井村と小野の利腕を左
右に執るよと見ゆしが同く六七間先さへ投付けられ二人折り重
なつて暫くは起き上る事も出来せん三人は武術に懸けては頗
る評判の高い方々ですが全然六助に逢つた日にやア子供も同然
……去れば三人の侍も舌を捲いて驚き道々の躰にて逃げ去つた
り六助は跡を見送りニツコと笑ひ城下を指してスタク参る
と三人の侍は追懸けられる事と心得て馬に鞭あて周章で逃げ出
して仕舞ひましたア此事が誰言ふとなく小倉の藩中に轟き渡
り毛谷村の六助は稀代の英雄である豪傑であると云はれたから

毛谷村六助

終に藩主のお耳に這入つた左近將監殿も是非一度六助の武術を
試して見たいと云ふんで態々使をお遣しに相成り城中に招いて
一審の勇士と仕合に及んだが誰一人として打勝つものはない
左近ウム六助は農民の倅とはヤセ天晴なり目通り許す……と仰
せられソコで六助は此前へ罷り出るとお褒めのお言葉がありお
手づから脇差一振を賜はつたが其日は夫れにて俵前を退くと扱
改めて俵召し抱への義を懸望に相成るスルと六助は素よと立
身出世は望む所と云へ兼てより権現の誠めもある事故決して
縁を食らないう六助「私しは百姓の倅故返つて百姓の業が身に叶
つて勝手宜しう俵座いますと辞退に及び夫とはなしに権現の
お告げと俺れに倅れた侍と立合をして若し勝つ者があつたら其
人に付いて忠勤を願ふたいと云ふ事を夫となしに言上いたした
から然らば當城下へ参る武者は一度六助と仕合をして勝つた

助六村谷毛

が出來たから其婆さんを背負ひ六助の家へ尋ねて参り夫れから
涙脆く親の爲めに斯うして浪々して居るが是非一度仕官主取
をして母に安心させたいが當小倉の城下にて承れば貴郎にさへ
勝てば大祿を以つてお召抱へになるとの事就ては誠によ兼たが
母を見送るまで是非共不自由なく暮らさしたいから枉げて一時
勝負に花を持たして貰ひたい母さへ見送つて仕舞へば又恩送
りの爲め直ぐにお暇を頂くからと眞しやかに述べました六助も
親孝行の志深き故之を聞ひて快よく承知いたし六助宜しうが
す左様いふ譯なら花を持たせましやうと多頼もなく受合つた内
匠は甘く欺し終せたなど内心舌を出して笑つたが面には願はさ
す他まで猫を被つて其日は別れて仕舞ひ婆を素の通り負つて歸
つたが素より見づ知らづの婆さんだから其足で直ぐに奥深き山
の中へ連れて行き内匠婆の口から此様ことが洩ちやア大變だ

助六村谷毛

俺の出世の坊だと其儘絞殺して仕舞つたと云ふは無慘の至り
で伊座います内匠は之より名前を變へて徹座彈正と申し立花公
へ六助と仕合を致したとき願書を差上ると早速お教しになつた最
初より六助には頼んであるから安心して彈正も支度を致し六助
と立合つたが正直な六助は計事とは露知らず母親の爲めだとす
されたから態と隙を見せて打込ませたが彈正は此處ぞと満身の
力を籠め彈正「エイッ……」と一撃六助を殺す覺悟で打ち込ん
だから六助も驚いた六助「此様約束じやアなかつたがど思つた
が正道に違約しちやア往んども言へませんから一寸頭を捻つて
肩先きを打たした大祿の者なら目を眩はして仕舞うんですが流
石は六助満身の力を籠めて之を受たので返つて竹刀の方が刃つ
返つて仕舞つた六助「参いつた……」と云つたもので伊座います
から全く彈正の方が六助より武術は上と思はれて遂に殿よりお

百五十六
盃を賜はり師範役と相成りました處へ彈正の行術を尋ねて吉岡
一味齋の妻お松并にお園お菊の二人が小倉の城下へ乗込むの件
り……

第九席

吉岡母子は越州を出發いたし所々行術を尋ねて見ます
極内匠の在家が知れない、此頃聞けば豊前小倉藩に於て
近將監が多くの武藝者を召し抱へん爲め洗れも腕試しに
にて有名なる毛谷村六助と試合を仰せ付け勝つた者には
腕に召抱へ師範役に致すといふ事だが扱誰一人として六
腕にも立つものがない處が此頃劍法の達人なりと浪人微
正といふ者首尾克く勝を制し立花公へお抱へになつたとい
判が世上に高い一味齋妻此頃聞けば豊前の小倉で微塵流の

毛谷村六助

人微塵彈正といふものが首尾克く六助とやらに勝つて師範役
なつたそうだが若しや仇の京極内匠が名を變へて微塵彈正と
つて居るのではなからう何は兎もあれ何處へ往つて尋ねるも
こと場合に據れば左様でないとも限らない物は試し尋ねて往
て六助とやらに逢ひ人跡格相を聞いて見やう娘夫れが宜しう
座いましやうと之から支度を致し九州を指して發向いたし毛
谷村六助といふて尋ねて見たら直に解りました夫處で母のお松
よりして毛利家の家來吉岡一味齋の妻并に娘なる事并に一味
齋は微塵流の達人京極内匠といふ者の爲めに非業の最期を遂げ
た事自分達は仇討の爲め故郷を出發して諸國を尋ね廻つて居た
が圖らずも噂に聞かた小倉藩の武藝者召抱への次第處が微塵彈
正と云ふ浪人が六助様に勝を制して師範役になつたと思つて尋ねて來
モンヤ敵の京極内匠が變名したのではないかと思つて尋ねて來

毛谷村六助

毛谷村六助畢

松と娘のお菊の如くトウ、其場に斬り墮されました見物人は
ヤンヤと賞め暫しは鳴も静まりませんでしたたが茲に母子は首尾
克く本望を遂げ暇を告げて越州へと立歸つたが此時お園は立花
家老臣の爲めに所望せられて媒介を以て六助に嫁はされお菊は
故郷へ歸つて吉岡の高弟衣笠彌右衛門と遊へ夫婦となつて吉岡
の姓と襲ぎ再び道場も築いたといふは後日のお咄しで御座いま
す

鶯塚仇討美譚

第一席

エ、此度は鶯塚仇討美譚を言上仕ります……此鶯塚と云ふの
は全く鶯の由縁あるものにして鶯が手引をして仇討の本懐を遂
げましたといふ一寸目先きの變つて居る講談である併し此筋と
いふ物は大總入り組んで居りますのですからナカ、三十席位
じや辨じきれない依つて有名な處だけ播擲んで伺ひますから其積
りで御聞取りを願ひます……エ、此處に河内國楠氏の一族に佐
々木源太左衛門といふ至つて篤實の君子がある近郷の人も其徳
を慕つて尊敬致すといふ誠に評判の好ひ人だ處が其頃鎌倉に於
て淀川の堤普請を致さんければならんといふので此儀を源太左

譚美討仇塚鶯

術門へ仰付つた源太左衛門も公儀の御用を仰付つたのであるか
ら大に面目を施し早速支度になんで鎌倉を差して登る大井川を
で登る内は別に何のお説しもなくたが川に存じの通り此川は少
し雨が降り積まされど水出がして川留となる。×モ、
今日日はモ一川は止りましたかねい大概の事なら渡して貰ひて
いもんですが人足駄目だ。見た通りの水勢で飛び込んで
覽じろ直に浮陀佛……先づ二三日ちやア川止めだ。×ヲヤ、
夫れじやア仕方かねい二三日之りやア逗留もんだ源太左衛門も
折悪しく此處へ差懸つて参りますと大井川々留めと云ふ事です
から據ころなく岸田屋といふのへ宿を取つて川の開くまで逗留
して居たがナニシロ毎日々々ビロロ降つて居るもんでか
ら二三日逗留位はじやアナカク向ふへ渡る事が出来な宿屋
はモ一何處でも大入だ其内に後廻しの荷物といふものがモ一來

譚美討仇塚鶯

て仕舞つて間屋場へ着いて居るソコで一先づ間屋場から荷物を
引き取つて岸田屋へ運ばせたが荷物といつた處で鏡櫃が一個に
跡は自分達の手廻り道具が遺入つて居る斗りだ源太忠兵衛や
間屋場から荷物が着いたから念の爲めだ一ツ内を改めて見やう
夫に小出しの金じやア少し鎌倉道は覺束なくなつたのでモ一十
兩も出して置かうとソコで自分の家に手代に遣つて居た忠兵衛
どののど共に鏡櫃の蓋を取つて見た源太ヲヤッ……忠兵衛之
を見な鏡は欠落をして仕舞つて鍋釜が身代りに立て居るよ忠
へモ一何れも不思議な事があるもんですナア……成程之りやア鍋
釜が身代りだ源太正逆に荷物は間違ひやア仕舞ひな此通り黒
皮で張つてあるしするから座左様で座います間違る筈は
座いません荷札にも佐々木源太左衛門と認めてありましたから
ソナ事も有りそうもないもんだ……ダガ能く見ますと此方

の方がモット品物が新らしいかと思はれます夫れに鍵の工合が大層悪るい合う事は合うが余程無理をしなけりやア明きません源太左様か夫じやアモ一變荷札から何か改めて見やうとソコで兩人にて悉く取調べて見ますと成程佐々木源太左衛門と書いた番風は誠に能く似て居りますが加賀國佐々木源太左衛門としたりとめてあつた忠實ア今ヤ上た通し俺しの主人の荷物といふナア此座いましやう源太ホ一成程加賀國じやア大變な違ひだ此方は河内國と認めてあるんだから大方之りやア問屋場の間違ひたにやア相違ない忠兵衛どん一ツは苦勞でも調べて来てお呉れな忠實ア今ヤ上た通し俺しの主人の荷物といふナア此違つたので自分達の荷物にはヤーンと其儘で河内國と歴然認め

河内國佐々木源太左衛門と書いた方が確かなんで唯今受取つたのは加賀國佐々木源太左衛門だ姓名は全じだが國處が違う一ツ引換へを願ひたい問屋場役人も此事を聞いて尤だとは思ひましたか
○マア夫じやアお待ちなさい其佐々木源太左衛門様と仰しやるナア直此先きの倉本屋にお泊りで座いますから一ツ聞き合して見ましやう忠實夫じやア何か分願ひますと忠兵衛は問屋場からの挨拶を待つて居りました

第二席

スルと問屋場からの挨拶がある事と思ひきや加賀の佐々木源太左衛門と云ふ者は自身に岸田屋へ遣つて来た加源之は初めてお目に懸る拙者は加賀國佐々木源太左衛門と申すもので多座る爾今お見知り置きを願ひたい河源イヤ之はヤし後れました私

譚美討仇塚鶯

しは河内國佐々木源太左衛門とすもの……此度は又飛んだ行
き違ひで迷惑を相懸け何共ア譯は座にせんと云ふ事もあ
は其儀に就て今日伺ひまして座に付けなすつた様な事は座
るがヨモヤ拙者の荷物へは手付なすつた様な事は座るまいな若し又金
まいな拙者の鏡櫃の中を改める様な事は座るまいな若し又金
子の紛失杯があつて跡で彼此れやすやうでもお互に迷惑を致す
から念の爲めや上て置く河内之は……改めましたか鍋釜杯が道
隠し居つたので驚き問屋場へ懸合に及んだ始末尤もホンの上
入つて居つたので驚き問屋場へ懸合に及んだ始末尤もホンの上
の一品二品を取つて見ました文で座るから一應改めを願ひ
たい加源ハ、ア宜しい夫ヒヤア中を一應改めやうと立つて鍋櫃
たる者は鏡櫃の中へ鍋釜等を入れて濟みますか殊に拙者の櫃の中
中には金子三百両入れて置いたから若しや夫れを御覽になりは

譚美討仇塚鶯

致しませぬいな河内夫は素よりの事金子杯は手を付ないばか
りでなく遣入居る事やら居ない事やら夫さへ存せぬ位で座
る中を加源ハ、ア宜しい夫ヒヤア中を一應改めやうと立つて鍋櫃
の三百両が煙りとなつた……と再び元の座へ直り加源河内の源
太左衛門とやら品の間違ひ位は既しも有勝の事決して咎めは致
さんが大鉢中を改めずとも外の模様でも分りましやう然るを中
を改めて鍋釜だなどい言ひ懸てを少し殊には貯への三百両とい
ふ大金が紛失致し居つて夫の間違つたとは何事でも座るア身
返答に據つちやア此儘には濟まされせんぞと刀を引き付け身
構へに及んだり驚くかと思ひの外河内の源太左衛門はニッコと
笑ひ河源ハアお噪ぎ召るな此鏡櫃は誠貴殿の物か何かは知ら
ねども加賀國佐々木源太左衛門と認めてある故一應問屋場へ懸

合ひ拙者の荷物を引き取つた迄の事未だ此通り拙者の荷物は
も切らず其儘だか中なる品が拙者のす處と符合致せば素よ
拙者の荷物に相違なくサア貴殿の比覽の處にて切解き拙者之に
て一々中なる品をヤ上ん改め下さい加源宜しい然らば左様
致とうと愛で悉く改めて見九處が河内の源太左衛門のす處に
一品でも間違がない河源如何で座る唯今や述べた丈が拙者の
品物夫より外は座いますまいナ加源左様さア夫れ丈だ
河源然らば其品は拙者の品に相違ないとして受取ましやうな
る品物は全く拙者の觀りにて鍵を開きしが何よりの疎忽つて
貴殿の御荷物でなければ其旨を問屋場役人に訴へ何時此荷物が
持主の手へ還入つて苦情が出やうとも拙者が受け答辨致す旨
の一札を入れて置こう貴殿の荷物でも拙者が早退間屋場へ引き
渡しますから……加賀の源太左衛門は此一言にグーッ息が詰

第三席

ちまつた加源ナニ左様いふ譯なら余りお手数を懸けても濟ま
せん故に此儘お引取りさう河源然らば別に存は座いませ
んナ加源仕方がない不時の災難と歸めましやう河源何とほ
意遊ばす加源イヤ何此方の事で……然らば免とコソ〜と
して歸りましたたが扱之より一ツの騒動を引き起すの件り……

加賀の佐々木源太左衛門は河内の佐々木源太左衛門に悉く言ひ
籠められまして素々素生の宜しくない者で浪花に居る時も廊
へ足を入れて稲葉屋の九重といふのに熱くなりお上の御用金ま
で手を付けて夫がため鎌倉へ召し返される途中でありました夫
れだもんですから全く言ひ懸を云つて鐵櫃の蓋を明けたのを
幸ひ少なからぬ金をせしめやうと云ふ至つて悪い了簡だガ元

譚美討仇塚鶯

を巧んだ仕事ですから忽ち河内の源太左衛門に見頭はされ終に
一言の下に遣り籠められて仕舞つたが切斯うなつて見ると余り
一裁の宜しくないもの夫れ故加賀の源太左衛門に於きましては
大に立腹に及び加源如何にも今日の一言は残念であるが那の
鐘櫃を改められた時中から出た五百兩の金子……俺も斯うして鎌倉
へ呼び返されても公用金を遣ひ込んだのは尻の割れる譯だから
率ろ河内の源太左衛門奴を殺して仕舞ひ那の金を奪つて欠落を
致そう長い浮世に短い命ち榮耀榮華に暮すも一生費乏して終る
も一生同じ事なら太く短かく遣つた方が割方だらうと太いた了簡
を起したものでトウく其晩岸田屋へ忍び込んで一刀の下に源
太左衛門を斬り殺し彼の五百兩の金子を懐中に入れ逃げ出さう
とする處を忠兵衛が目を醒して認めたから忠俺れ盗賊……と
枕刀を取つて追つかける源太左衛門は此勇氣に驚いてスタ

譚美討仇塚鶯

逃げ出した忠俺れ何處まで逃げたつて免すものかど勢ひ込ん
で追ひ懸けたが源太左衛門も一生懸命裏手の塀を乗り越して外へ
飛下りんとする時被つて居た覆面頭巾がバラと落ちた忠ヤア
吾やア晝間来た加賀の佐々木源太左衛門だなモ一面を見りやア
追はずと宜い緩く尋ねて仇を討たうと跡も氣に懸りませ事故
其儘素の座敷へ引き返して來たがモ主人の源太左衛門は敢な
く息は切れて居るサア宿屋でも強盗が忍び込んで客を殺し金子
を奪つて逃げたといふんで上への騒ぎが何時まで斯して居
た處で仕様がなから宿の亭主ども相談し兎も角も檢死を受け
て近所の寺へ葬り忠兵衛は鎌倉へ行く事も出来ず河内の國へ歸
つて此始末を物語つた妻の概は驚く事大方ならず夢に夢みし心
地して暫し涙に暮れて居る忠兵衛も思ひ兼ねて共に涙を流した
據どふるなき事故に時の領主石川典勝に之を訴へ出たが源太左

譚美討仇塚鶯

衛門の弟に源吾といふ者があつて典膳と腹を合せ俺れが佐々木の家を乗取らうといふの精神で甘く典膳に頼み込み愛に佐々木家断絶に及ぶといふ悪人増長のお咄し次第に於て詳しく辨じま

第四席

何うも腹の悪い人に逢つては仕方のないもので義理も人情も皆みす唯々己れさへ利すれば夫れで宜といふ事に眼を付けて居りますから誠に困る佐々木源吾も兄源太左衛門が殺害されたから愁鬱いたす事と思ひさやナカノ心配杯の気色は更らに見えな

譚美討仇塚鶯

で一旦没収した上で今度は源吾に下すつたゆへ源太左衛門の妻の楓井びに悴の源之助は臆の宜いお拂ひ箱となつて仕舞つたやうな譯です母子の嘆きは一方ならずあります源之助は稚き時より武術を稽古して非常に熱心だもんでしたから今は大に上達した故に是非父の仇を討ちたいといふ復讐の念を起し母の楓に

母イ

百七十四
お取り上げになつた家財道具も實はア源吾の策略で一掃召し
上げて仕舞つたのを改めて自分が頂戴致すやうに仕やうといふ
事を石川様にお願ひやての事だといふ噂……ドウして夫様鬼み
たいな人の處へ幾ら身寄りでも往て居られるものじやアない夫
よりやア弊をお前と難儀を一緒にして乞食補乞にならうとも更
に厭ひは致しませんモ一何せ斯うなりやア夫れ迄の事ア浮々
して如何な災難に逢うか知れない早く此場を立退かうと思は
流川堤へ往つて乞食の仲間入を致し浦鋒小屋へ道入つて思ひ
客らぬ袖乞となり往來の人の袖に絶つて一文二文の合力を受け
内々で敵の様子を探つて居ります併し中々似寄つた人も通らな
いので空しく月日を送つて居りましたが降つて湧いたる一ツの
災難は終に母楓の生命を縮める様に相成り源之助は父と母との

百七十五
仇を討たねばならぬ様に相成りますが一寸一喫致して言上仕り
ます
第五席
佐々木源吾は石川典膳に賄賂を遣つて旨く佐々木を横領したが
扱肝心な家の系圖と旭丸と云ふ家重代な名劍がない之がなく
やア後に出世の種に差支ると大に苦心して搜索致しますが見當
らないソコで考へた源吾何でも之りやア源太左衛門の女房楓
井に源之助が立退く時に之れ丈け持つて往つたにやア違ひない
聞きやア此頃淀川堤で乞食をして居るとやら宜い塩梅に那の二
品を持つて居て呉れば宜いがとトツライッ思案に暮れて居るが
源吾ア、寧ろ人知れず彼れ等母子を亡き者にして奪ひ取れば後
腹痛めずに望みを達する事が出来やうと益々祿な考へは致しま